明治三十七年五月[illegible]日第三種郵便物認可

女子青年界

明治の女子改題

改題に際して

明治を名に負へる本誌は、明治帝の崩御に殉じてその名を送り、新らたに「女子青年界」として生れ出でぬ。あはれ「明治の女子」、「明治の女子」、汝もまたかの聖代に若き女子等の師となり友となりて仕へし一人として、永く汝を知る者の胸に刻まれんなつかしき汝が名よ。

今その名を續ぎて生れたる「女子青年界」は、春秋豐かに、希望は多し。これより愈々多事ならんとする我が婦人界のよき友よき師となりて健やかに生ひ立たんことを祈りて止まず。

編者記

日本基督教女子青年會發行

第九卷第八號目次

「女子青年界」

一、「女子青年界」は日本基督教女子青年會中央委員が發行する雜誌也。
一、「女子青年界」は一年分郵稅共五拾錢、一部郵稅共金五錢とす。
一、日本基督教女子靑年會は女子の衛生、社交、智識、靈性上の發達を圖るための團體也。
一、日本基督敎女子青年會中央委員左の如し。

委員長 井深花子
副委員長 岡見慶子
記錄書記 三谷民子
會計 井上友子
萬國基督教女子青年會同盟委員 萬國學生基督教同盟會委員 河井道子
「女子青年界」編輯主任 小此木松子

東京在住委員
津田梅子
鈴木歌子
長谷川喜多子
ジー、エム、フイシヤー
エ、ビー、カエスト
小此木松子
二宮貞子
サラ、エリス

地方在住委員
大阪 廣岡淺子
京都 佐伯小糸子
京都 松田道子
名古屋 ミス、ウイン、サザルソン
岡山 上代政子
大阪 荒木幸子
京都 ミス、デントン
廣島 ミス、ゲインス
函館 ミス、ドランロー

幹事
日本基督教總幹事 エ、ジー、マグドナルド
同幹事 アール、レーガン
東京基督教總幹事 エム、エル、マシユリ
同幹事 ジー、アール、ワトネ
同特志幹事 エム、ページ
「女子青年界」編輯掛 小橋三四子

明治天皇陛下御尊影



奉悼の辭

大君は神去りましぬ。あはれ明治の御世に限りなき國運の榮を祈り、光輝ある聖代を感謝に送りつゝありし我れ等國民は、晴天に霹靂を聞く思ひに御不豫の公表を拜し、誠に一國を擧りて深愁に沈み、日に、夜に、祈り禱りて御平癒の程近からんをひたすらに待ち奉りしを、噫、遂に人の力及ばでありき。今や國民は未だ曾て知らざる悲しみに在り。天地は寂として、秋風喪章に寒し。

明治天皇の御治世や、國威四方に揚がれること、建國以來其の比なし、聖明の御大德は廣く國民の儀表と仰ぎ奉るのみか、誠に世界の英主にましますと、海外各國の輿論は頌し奉れり。

今や、今上陛下至孝、至明に渡らせらるゝ御英資をもて大統を紹がせ給へり。明治天皇の御遺德は、永しへに帝國の光りと輝きまさん。我れ等は明治の御世の終りを哀しむと共に、新しき御世の幸を祈り奉る。

記者謹記

明治の帝御事歴

明治の帝は、孝明天皇の第二皇子にましまし、嘉永五年九月廿二日、卽ち太陽曆に算して十一月三日午後二時御生誕、祐宮と申奉り、御年九歳にして皇太子に立たせられ、御名を睦仁と賜はせらる、慶應二年末孝明天皇崩御、翌年正月、日本帝國第百廿一代の寳祚を踐ませらる。御齡十六歳、同年一條忠香公女美子姬入內あらせらる。年號を明治と改めさせらる。

先帝御生誕の翌年浦賀に米艦來り、開港の是非に就て論議喧しく、尊王の說盛に唱道せられ、海內騷擾の間に、先帝踐祚あらせらるゝや、其の年幕府は大政を奉還し、王政復古維新の令を下し給ふ。卽ち天皇御親政の下に、舊來の諸制度を改め、新法を布き、海外諸國との交通を開き、國民の教育を振興し、民業を勸めらる。上下新政に悅服して、斯くして光輝ある明治の歷史は進運の緖を開けり。

○

更らに時代は進轉して、世界列國と國際關係次第に濃密を加ふると共に、世界の大勢は、東洋、殊に極東の地に寄せて、風雲誠に多端、而して我國は兵を國外に動かす事前後數回、中にも廿七八年、卅七八年兩役に於ける光榮ある戰勝の結果、一國の地位列强の間に伍するに至れり。次で明治四十四年に至り朝鮮を併合し、曾て屢々禍亂の根源となりたる半島は旭日旗の下に、平和の進運に向ふに至れり。これにより東京新橋より、歐羅巴に直行の旅程開け、朝鮮の鐵道は世界の交通路となれり。

○

明治維新以來外面の發展は斯くの如く忙しかりしなり。更に內面の進步の道程を顧るに、鎖國の鍵一度開かれて、大にしては一國の政體の改革、それに連る諸制法の革新と、海外との交通により移されたる新らしき生活が、國民の思想に大なる轉化の機を與へられたるは云ふ迄もなき事にして、それに續きて世界の一等國に列ぶに至れる國運の進轉及び世界的思潮の刺戟は國民の內省を促して、靈性の革新更生を刻々、愈々に思慕するの時代に入りぬ。

僅か四十有餘年の間に、斯くの如く多岐にして、險峻なる坂路を踏み越えつゝ、是に至れるは、全く

英明なる　聖天子の統べさせ給へる治世の賜たるに外ならず。即ち開國以來常に我が進歩發展を廣く人類の上に置き、內には國民の敎育を計り、自由を進められたればなり。憲法に由つて信教の自由を與へらるゝ國民は世界最高の理想を尋ねて靈の救ひを求むるべく、更らに總ての學問、藝術また世界の思潮に棹して人文史上に貢献する所あらんとす。

○

明治の帝崩御あらせらるゝや、海外各國に於て、官民共に誠意を以て哀悼の意を表し奉れり。而して何れも　陛下の御鴻業を稱へ、御盛德を仰ぎ奉れり各國新聞が先帝を稱し奉る言に或は世界に比類なき御事業を成し遂げ給へりと云ひ、或は奇蹟に近き御偉業と云ひ、他國が千年を要したる文化を六十年の短時日に成就し給へりと云ふあり。要するに何れも世界に比儔稀なる英主と頌揚し奉らざるはなかりき

御治世年表

○元年　天皇紫宸殿に出御、五ケ條の御誓文を宣し給ひ、天皇御親政の御布告あり、同年江戸を東京とし、都と定めらる。

○二年　都を東京に遷す。

○四年　廢藩置縣。岩倉具視を全權大使として歐米各國に差遣さる。始めて郵便を設けらる。

○五年　西國御巡幸。太陽暦を行ふ。學制頒布。京濱間鐵道開通。全國徵兵の制を定む。

○六年　全國の地租改正。鎮臺を置く。

○七年　臺灣事件に就て清國と交渉あり。

○九年　東北地方御巡幸。

○十年　減租の恩詔下る。西南の役。內國勸業博覽會を開く。

○十一年　東山、北陸御巡幸。

○十二年　勤儉の詔下る。皇子嘉仁親王御生誕。

○十三年　近畿御巡幸。

○十四年　各國公使を召し觀櫻の宴を給ふ。北海道御巡幸。明治廿三年を期し國會開設の詔下る。

○十五年　陸軍に勅諭を下し給ふ。

○十七年　朝鮮事變。

○十八年　山陽御巡幸。始めて內閣組織さる。

○十九年　帝國大學校令、諸學校令發布。

○二十年　天皇、皇后京都行幸啓。海防費獻金の

詔下り、內帑金下賜。嘉仁親王立太子宣下。
○二十一年　皇女常宮昌子內親王御生誕。
○二十二年　憲法發布大典御擧行。
○二十三年　皇女周宮房子內親王御生誕。敎育勅語を賜ふ。帝國議會開會。
○二十四年　皇女富美宮允子內親王御生誕。
○二十七年　兩陛下大婚廿五年祝典御擧行。日清戰役起る。宣戰詔勅下る。大纛を廣島に進めらる。
○二十八年　日清講和條約成り。臺灣我が版圖に入る。
○二十九年　皇女泰宮聰子內親王御生誕。
○三十年　英照皇太后崩御。京都行幸。金貨本位制度實施。
○三十一年　新民法實施。
○三十二年　條約改正成る。
○三十三年　皇太子殿下、九條節子姫と御成婚。
○三十四年　皇孫迪宮御生誕。
○三十五年　日英同盟成立。
○三十六年　皇孫淳宮御生誕。
○三十七年　日露國交破る。宣戰詔勅下る。
○三十八年　皇孫光宮御生誕。ポーツマス講和條約成り。戰役終結。大廟行幸。韓國我が保護國となる。
○三十九年　英國よりコンノート親王來朝。陛下にガーター勳章捧呈。
○四十年　韓國太子留學の爲め來朝。
○四十一年　昌子內親王竹田宮と御成婚。戊申詔書下る。
○四十二年　房子內親王北白川宮成久王と御成婚
○四十三年　允子內親王朝香宮と御成婚。韓國併合朝鮮我が治下に歸す。
○四十四年　施藥救療の詔下り。內帑百五十萬圓下賜。日英同盟改訂成る。
○四十五年　七月十四日　聖上御不豫。十九日より重らせられ、卅日午前零時四十三分崩御あらせらる。

御逸話

○

先帝御年八歳にならせられたる年の六月、御父帝孝明天皇には、先帝を從へさせられ諸藩兵の調練を

御覽あらせられけり。時に一天俄かに曇り、激しき雷雨となりたれどまだ幼う渡らせらるゝ祐宮には怖るゝ御氣色もなくて、赤地の御振袖に、菊綴の御長袴召させられ、御簾揭げさせて端近う出御まして、御機嫌麗しく御眼も放たせ給はざりし。總大將蜂須賀阿波守遙かにその勇しき御有樣を見奉りて感涙とゞめ得ざりしとぞ。

○東京に遷都ましまして後皇居炎上あり、赤坂離宮を假皇居と定められ、新宮御造營の事となる。有司一千萬圓の豫算を立てたりしに、先帝には其の規模を御覽じ仰せらるゝやう「如何ばかり太平の世なりとも諸民悉く豊かにして其の所を得る者のみあらざるべし。されば朕の宮殿のみ壯麗になさん事朕の願ふ所にあらず」との御旨にて費用を節減せさせ給へり。又每年豫算編成の際、宮内省の當局を召させられて苟も祖宗の御祭典、及び慈惠救濟の費は、多きを厭はずと雖も其の他の調度は節約すべきやう仰せあり、而して皇太后陛下の御用度は節減すべからずとの御命を英照皇太后には聞召されて、上に於かせられてさばかりの御儉德あらせらるゝを、我が爲めの供御を節すべきやうとの御旨を下されしが、先帝には御聞入あらせられざりしと承る。

此の度の御大事ありて、諸大官は初めて大奥に奉伺せるが、表御殿に比してあまりには儉素に渡らせらるゝに驚嘆しあへる由なるが、傳へ承るに燈油を御用になる事とて御壁も煤ぼりて、古めき見ゆる御殿の御樣なれば、明治以前より御建物にもやと思はれしに、さはなくて年頃御手入を遊ばれぬが故なりとの御事なりしと、それのみならず、御居間に敷かせられし絨氈の質素にて、その荒き手觸りに、涙とゞめあへざりしと、某老將軍の直話に見えたり。

○堅忍剛毅の御德を備へさせられしとは、曾て何事にも妄りに御心を動かし給はざりしとの御事なるが七月十日、帝國大學に行幸の折、階段を御昇降あらせらるゝに、殊の外御難儀の御樣子なりしと承るが更らに十四日樞密院會議に出御あらせられ、常には御威容正しう、端然と御椅子に倚らせ給ふに、此の日のみは兩度程玉體を動かし給へりしとの御事なるが、御耐忍強き陛下にましませば、御一言も御苦痛を仰せられず、御政務を一日も空しう遊ばされざ

りしなり。

○

毎朝五時半、乃至六時に御起床ありて、東京、大阪、京都其の他樞要の地の新聞御閲讀、八時に御學問所に出御、御案上に堆き文書を御披見あらせられ一々御裁斷を下し給ふこと、御登極以來一日も變らせ給はず、日曜日にさへ出御の御事新聞紙に由て報ぜらるゝ事絶間なかりし。四時迄御執務あらせられ大奥に入御、御晩餐の後は、皇后宮と何くれの御物語あらせらるゝ御事もあり、御書見遊ばさるゝ御事もあり、政務多端の際は夜中にも文書御覽あらせらるゝ事珍しからざりしと承る。侍臣より御休養を御勸め申しても莞爾と肯かせ給ふのみにて、未だ一回の御避暑も、御避寒も拜聞し奉らざりき。

○

御遊幸などの御沙汰もなく、國務御親裁に一日の御暇もなくあらせらるれば、折々の御心遣りとては和歌を遊ばし給ふのみなり。畏しこけれど、御作は九萬餘首に上り、御作風また御歴代を通じて、誠に比類なくあらせられ、眞に歌聖と申奉るべしとなり。曾て東京帝國大學教授英人ロイド氏が、米國紐育のインデペンデント紙の依囑により、世に傳へられたる御製を英譯したるを、各國帝王の御覽ありてより世界至る所、日本國皇帝陛下には、比類なき御武勳を輝かし給へるのみならず、一大詩人に渡らせらると一層の尊敬を奉られたり。斯くの如き御秀歌も誠に御繁忙の間に詠ませられしと拜察せらるゝは左の御製なり。

思ふことありのまに／＼つらぬるが
いとまなきよのなぐさみにして

○

御治世中、海外に皇軍を進め、外國に干戈を交ふる事兩度、畏しこくも大元帥として海陸軍を御統率あらせられ、類ひなき御勇武の御氣象もて將を勵まし給ふとともに、將士の勞苦を勞はらせ犒らせ給ふ事大方ならず、寒夜にストーブを消して野營の勞苦を思し遣らせ給ひ、大本營の行在所に、承るだに畏き御不自由を凌がせ給ひしなりき。而して二十七八年の役の事なり、旅順の要塞陷落の報ありて直に奏上したるに、陛下には聞召されて、龍顏曇らせられければ、如何にし給へると侍臣は恐々伺ひ奉りしに清國の皇帝には、定めし憂悶に沈まれつるならんと

仰せ言ありしと、君主とあらせられての御同情の如何に尊き事よ。三十七八年の役には包圍中の旅順要塞內にある露國の非戰鬪員を憐れに思召され、彼れ等の保護を計るべきやう攻圍軍司令官に旨を下させ給ひぬ。一視同仁の御慈みの有難さよ。

○

先帝には、皇后宮との御中らひいと麗しう渡らせられけり。今の皇太后陛下の御才德高う、賢明にあらせらるゝは、皆人の仰ぎ奉る所なるが、仄に承れる事あり、曾て　先帝の御座所近く御愛養し給へる犬あり、御恩に狎れて伺候の人々に飛び掛り、戯れつく事屢々なり、人々困じはてつゝも誰れ一人申上ぐるものもなかりしに、いつか　皇后宮の上聞に達し、先帝に斯くと奏聞あらせられければ先帝には直に御愛犬を退けさせ給へり。其の後　先帝には某元老に此の御物語りあり、皇后宮にはものゝ條理に明るう渡らせらるゝよし仰せられけるとぞ。

○

曾て愛知縣地方に大演習を御統率あらせられける折、武豊より半田の行在所に還御の際、御愛馬金華山の控へけるを御覽じて御召列車に載せ歸れと御命あり。かくて半田に御着ありければ、金華山を牽き出し、玉車に沿ふて進みしに、金華山は玉車の前に至るや歩を止めて進まず、御車窓に首さし延べて、頭を垂れ、低く嘶きたれば、玉顏笑を含ませられ、頭を撫し給ひ、御降車後、乘御、還御あらせられしとぞ。

○

先帝には誠に寬宏にましましけり。曾て救世軍大將ブース氏來朝したる時、謁見仰せ付けられたり。大將は何れの場所に出るにも救世軍の正服を着したりしなれば、禮服の持合せなかりき。されば大將は正服にては禮を失する事もやと案ぜられしを聞き、時の林外相は其の由を奏上せしに　陛下には「正服にて苦しからず」との仰せありしにより、大將は喜び參內したりしと。

記者謹記

御製

わが心およはぬ國のはてまでも
よるひる神はまもりますらむ

目に見えぬ神に向ひて耻さるは
人のこゝろのまことなりけり

曉のねさめしつかにおもふかな
わかまつりこと如何あらむと

政事いてゝきく間はかくはかり
あつき日なりと思はさりしを

子等はみな戰の場にいてはてゝ
おきなやひとり山田もるらむ

いかならむ藥すゝめて國のため
いたて負ひたる身をば救はむ

よの中は高き卑しきほと〳〵に
身を盡すこそつとめなりけれ

年立て祝ふにいとゝすくなれと
わか世の道をおもひぬるかな

思ふ事思ふかまゝにいひいつる
幼なこゝろやまことなるらむ

眞心をうたひあけたる言の葉は
一たひきけはわすれさりけり

家なしと思ふ方にもともし火の
影見えそめて日はくれにけり

日本基督教女子青年會 夏期修養會講演

基督の教訓と婦人問題

廣岡淺子

明治は既に四十五歳と云へば若い年ではない、この間いろ／＼の文明入り來り、物質的の方面は驚く斗りの成績が擧つて居るが、いまだ精神的の方面は實に幼稚である。殊に婦人界は男子に後るゝ事非常にして、改善を要する問題は、今日多く眼前に横はつて居る。

△婦人の教育

先づ第一婦人の教育問題も、男子によつて成されて居る。而して高等教育反對論等が出てゝも、誰れ一人婦人が聲を擧げて之れを駁する者はない。また婦人の教育はかくありたいと熱誠を以て叫ぶ者はない。皆蔭ではとやかく云つて居つても、いざとなると男子の意見に左右されて終う有樣である。それ故男子の我儘、傲慢の態度を抑える事は出來ず、婦人は尙その配下に在つて、彼れ等の思ふ儘に形造られて居る。

△婦人の取るべき道

然らば如何に婦人は教育されたらばよいであらうか。御承知の通り孔子は「女子と小人とは養ひ難し」と云ひ、釋迦は「蛇を見るとも女人を見る勿れ」と云つて居られるが、かやうな聖人でも、佛樣でも女子は只度すべからずとして、餘りよい教へを與へられてはない。只基督に於てのみ、神の前には男女の別はなく、等しく神の子として許されて居る。而して女子の靈性を發揮して、無限にこれを向上せしむるには、基督教によるより外道なしと思ふのである。

或人が外國に行つた婦人が、とかく輕佻浮薄に流れ育兒も家政も他人に任せて、自身は白粉して夜會に

飛び歩き、疲るれば長椅子に身を橫へて眠り、身に金玉を鏤める爲めに夫を苦しめるといふ有樣を見てこれは外國の文明が惡いのではないかしらと、暗に基督教もまた婦人を教化するの力なしといふ樣な事を申した。左樣な婦人が基督教國にもあるには違いないが、然し基督教はさやうな婦人を妨いて參るのが本分である。彼得前書三章に一妻なる者よ、爾曹その夫に服ふべし。若し教に循はざる夫あらば、教に由ず、妻の行に由て服はん。そは爾曹の敬懼を以て、潔き行をなすを見に因てなり。爾曹の裝飾は髮を辮み、金を掛け、また衣を着るが如き外面の裝飾に非ず。たゞ心の內に隱れたる人、すなはち壞ることなき柔和恬靜なる靈を以て裝飾とすべし。此靈の裝飾は神の前に「價貴きもの也」とあるが、實に基督教は靈の價値を無上に認め、また行を以て人を化するを教ゆるものであつて、我れ我れ婦人はこの理想に從つて、眞實に修養すれば、時々折々男子の稱へ出す婦人論に動かさるゝ必要もなく、東洋の宿弊に捉へらるゝ事もなく、誠に神が與へ給ふた如くに立派に發展する事が出來ると思ひます。

△一夫一婦の教へ

なほ基督教に於て教へらるゝ最も大切なるものは一夫一婦の教へであります。既に神の前に等しく男女を認めた教へは、この一男一女が神の前に一體となつて夫婦が出來る事をも教へた。これは今日の我が國社會に是非一日も早く知らしめたいものであります。今日實際婦人が人らしき生活をして居る者が幾人ありませうか。殊に上流に於ては多くその妻君はヒステリーになやみ、夫の不品行に苦しめられて居る。先年朝鮮に參つて、その社會の家庭の紊亂甚だしきを見て、實に未開の國民を憐れと思ふたが、さういふ日本もなほ姉樣顏をする事は出來ない狀態である。かやうな家庭はまた決して健全の子孫を出す事は出來ない。幼い子供も母と共に父の無情を憤り、不愉快の日々を送つて居るのは、まだしもである、いつかその不行跡の感化は無垢な第二國民をも陷れて居る有樣である。社會の基礎の家庭を破り、第二國民を害して、どうして國家の發展を望まれませうか。口に忠義を稱へる者も、その實矛盾極る行ひをして居るではなからうかと思ふ。然し自分は婦人の立場として男子に注文するよりも、寧ろ婦人自身が之れを制して行く丈けの力を持つていたゞきたい

それには基督教の力によりて靈性を磨き、自分以上の力が加はつて始めて出來るものであると申たいのであります。

△法律の改正

既に婦人がその德性によつて男子の我儘を制し、その不德義を改めて參る斗りでなく、一方には法律の改正も必要であります。婦人は一寸した誤りがあつても非常の刑に處せらるる。それはよろしいが男子の方面に於ては、實に口語同斷な行爲を敢へてしても、一向に罪科に問はれない。その手にかゝつた婦人こそ、誠に悲しき犧牲である。こんな不合理な事がありませうか。これは女子が壓迫を受けた怨み返へしにせよと云ふのではない、正義の爲めにどうしてもこれを正さなければならず、男子の向上の爲めにも改めなければならないと思ひます。それ故婦人は法律等は緣遠き事として之れを等閑に付せず、充分に學んで、これが改正にも力を盡したいものであります。

△世界の最上のものを學べ

猶太民族は何故滅びたであらうか。自分共丈けが神の撰民であると思つて、自負した結果であります。我が國民も神ながらの國とて、自分は外國に學ばなくとも、立派なものを持つて居ると云つて慢じて居る者があります。然しもし左樣な態度であつたならば、決して進歩は望まれない。苟も國を思ふの徒ならば。世界のベストを取つて學ばなければならない。早くどこの國からでも善くなつたらよろしい。さうしたら世界人類が自ら引上げらるゝので、我が國のみ榮えん事を希ひ、他國は省みなくともよいといふ狹い考へを持たなくともよろしい、日本には固有の道德があり、東洋には立派な哲學があるから、敢へて他國に學ばずともよいとか、或はこれ等の特徴を集めたらばよいとか云ふが、それは畢竟曲學阿世の輩で決して眞に國家を思ふ者ではない、眞の愛國者であるならば、謙遜に世界のベストに學ぶ心掛けがなくてはならないと思ふ。殊に我が國家に於ては古來よく外國の文物を容れ、之れを同化して、參つたのである。明治に至りては、治國の始めに於て、畏しくも　陛下には廣く智識を世界に求むるやうにとの御詔勅を下し給ふたのである。頑迷にして動かぬ心を持つ者は決して愛國者とも稱へる事は出來ぬのである。

祖先と宗教

今井革

△盛んなる祖先崇拜の念

世間の人がよく基督教は實に善い教へと思ふが、もし自分が基督信徒になれば、祖先を祭る事が出來ないから殘念であると云ふ。祖先といふ事は日本人のよく云ふ事であるが、國學者の云ふ所、神道家、佛教家の云ふ所とは各々異つて居る。然し一般には祖先と云へば位牌と云ふ事に思ふ。我々から見ると位牌などはつまらぬものであると思ふが、往年楠本氏が衆議院議長の時、議會を代表して　陛下の御前に何か奏請する場合に、氏は懐を非常に膨まして居つた。　陛下は楠本は病氣ではないかと、御心配遊ばされて、侍臣をして私かに尋ねしめ給ふた處、「不肖の私が苟も四千萬の國民を代表して、陛下の御前に出づるといふのは、一門の譽、一家の名譽にして之れを私するに忍びず、父母、祖父母と共に出でんとて、位牌を懐にして參つたのである」と。かくと復奏し參らせた處、陛下にはから／＼とお笑ひ遊ばされたと云ふ事である。今日一國の政事を取扱ふ人が斯くの如く位牌に對して考へて居るとすれば、一般の人々が位牌に就て心配するのも無理ない事と思はれる。

△位牌の起元

扨佛教の位牌といふものは何處から出たのであらうか。佛教の説にはその起元を見出す事は出來ない。これは儒教の「死に仕ふる事生に仕ふるが如し」とか「親を祭ること在すが如し」と云ふ觀念から出たものである。而して位牌はその文字の示す通り位の札であつて、今死なれた人は位階勳等を持つと記した札である。然るに後ちには之れに戒名を記してこれに供へ物をして祭るやうになつた。

△戒名とは何ぞ

位牌に書く戒名とは如何なるものかといふに、これは戒律の名である。戒律は釋迦の律で殺生や窃盗姦淫、飲酒等を禁じたもので、五戒とか、八戒、十

戒、百六十戒、三百六十戒等多くの種類があり、その人の力量に應じてこの戒律を守ると、禪師、戒師から、居士とか　士とか、大師、信女等の戒名を貰ふ、これを死後位牌に書きつけたものである。然るに今日死後戒名を貰ふ人に、生前どこに行つて戒律を守つた人があるか、今日はお布施で買ふといふ有樣で、料理屋の書き付けも撰ぶ處がないといふ迄になつた。そしてその名は松壽信女とか、梅光居士とか、經文のめでたい名を取つて、僧が勝手につけるのである。

△佛壇の由來

戒名を佛壇に祭るのは、天武天皇の勅意によつて上座に佛壇を置き、朝な夕な一家族が禮拜するといふので、昔は今日の床の間が佛壇であつた。今日床の間に花を活け、香を燃き掛物を掛けるのは、佛壇のおもかげを止めて居るので、掛地は始め釋迦の像を置いたが、木影りは面白くないといふので、足利の時代から繪に書いたものを祭る事となつた。然るに後世佛壇は金ぴかな棚に墮落し、床の間は家の装飾に變つて來たのである。

△忌日の事

佛敎では忌日とか年忌とか云つて、其の日は特に佛樣にお供へ物をして祭りをする。そのお供へ物をするのは佛説であるかの如く考へるが、謂はれない事である。只佛敎では四十九日の間を大切のものとして祭らなければならないとして居る。それは佛敎に輪囘轉生といふ敎義があつて、我れ我れの世界は車の輪の如く囘り、善惡是非の行ひ如何によつて、或は動物に、或は鳥の世界に生れ、これに凡て六道がある。もし生前罪深き人でも、死後子孫が供養、追善すれば、その功德によつて、よい處に行くといふ。即ち四有とて、人の胎内にある間を生有、生れて死ぬる迄の間を本有、死ぬる時死有といひ、死後四十九日の間を中有といひ、此の世に緣がつきて未來の落付き場所が分らぬといふ所からこの間に往きて生まるゝ所即ち往生が定るといふのである。それ故實は四十九日過ぎてからは、後の祭りで、後世寺で金にする爲めに年忌といふものを屢々するやうになつたのである。此處に一言附したいのは、死後の供養如何によつて、生前の罪人も救はれるといふのは、實に佛敎の弱い所で、もしこの説が流布したならば、道德といふものは、この社會から地を拂つて

終はなければならぬ。

△輪回說と悲觀

もし輪回轉生說を信仰したならば、とてもこの世を喜び、樂しんで生活する事は出來ない。動物園に行つて、金絲雀を見てもわが孫ではないかと思ひ、鹿を見てもわが妻ではないかと思つては、泣いて計り居なくてはならぬ、行基菩薩の歌に「ほろ〳〵と鳴く山鳩の聲きけば、父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ」といふのがあるが、これは輪回說を鮮明に云ひ現はして居るのである。もし基督敎徒が山鳩の聲を聞けば、「あゝこれは神が汝はさぞ疲れたであらう、來りて自然の音樂を聞け、而して疲れを休めて更らに進み行けといふ有難い思召であらう」とて、膝づいて感謝するに違ひない。基督敎徒の爲めには、凡てが慰めであり、感謝である。「口一つ過す鳥さへ七つ起き」とある如く、朝鳥の聲を聞いても、われを警醒してくれやうとて、めざまし時計の如くあやまたず來つて歌を告ぐ。鳥一匹の生活するにさへ朝起きして働らくのである、どうして人間たるものが怠けて居られやうかと、自然を通じて神の惠みを感謝する

或人は佛敎は葬式の如く、基督は婚禮の如き宗敎であると申したのは、誠に面白い比喩であると思ふ。

△基敎と祖先の紀念

基督敎は全く祖先を忘れて終ふのであらうか。決してさうではない。私の敎會等では、永眠の信者の爲めに、年に一度位紀念會を開き、遺族を招いで相共に生前を忍び、また遺族等が一層高潔な生涯を送つて、祖先の志を喜ばしむる樣に、一寸した勸話等をするが、信者でない遺族もこの會に臨んで、非常に感動して歸る事は屢々である。かやうな紀念會は頃日諸所の敎會に行はれて居るやうである。基敎徒の祖先への捧げ物は、その身を潔き生ける犧牲として、神に供へよ、これなすべきの祭なり」といふ聖言が示す如く、子孫が潔く正しくなつて行くのが唯一のものである。精神的に祖先を崇め尊ぶのが、基敎の特色であると思ふ。

△佛敎遂にわれを救はず

多くの佛敎徒は宗旨を變へるのは祖先への罪だと信じて居る。然し若しよりよい道であると知つたならば、寧ろ進んで改宗すべきものではなからうか、自分は佛敎の敎役から轉じて基敎の牧師となつた者で、甚だしい改宗を行つたものゝ一人である。如何

なる動機で改宗したかといへば。神學を研究したのでも、佛教、基教の比較研究をしたのでもない。今より十二年前北海道の自分が住職して居た寺を病の爲めに暫らく去つて、神戸に出た。病氣も略回復した明治三十四年の夏、もう北海道の雪も解けたであらうから歸らうと、或晩暇乞ひに表に出た。すると辻に赤い提灯をつけた人が頻りに何か話して居る、近寄つて聞くと二十歳にもならぬ青年が、今晩これこれの教會で說教があると廣告をして居る。主義は違ふが、基教徒は熱心なものであると非常に感心した。そして教會に行つて見る氣になつて、早速青年の告げた教會を訪ふて說教を聞いた。然るに翌朝朝湯に行くと一人の青年が居て、あなたは昨晩說教を聞いて居ましたネ、解つたら信じたらどうですかと云つた。自分は基教は嫌いだといふと、桶を持つて來て自分の背中を流してくれながら、頻りに何か說教めいた事をいふ、自分は餘り耳を傾けなかつたが神、クリスト、聖書といふ樣な言葉が、度々繰り返へされたのを覺えて居つた。然し大膽な、勇氣のあるものだなあと感心した。翌朝また湯に行くと、またその青年が來て居つて、きのふと同じやうに流しをしてくれる、そして自分はこれこれの處で、聖書の參考書等も持つて居るから來るやうにと云つた。またその翌朝も行くと來て同じ事をする。熟々思ふと實に感心なものだ、どうしてあの熱心が持てるであらうかと考へた。數日經つて夕飯後買物に行くと下山手通り三丁目の電信柱の處に、十字架の提灯をつけて教會で說教があるといふ廣告をして居る人に私はまた遇つた。當時自分の心は大に煩悶して居つて、天を恨み、人を怨み、この我れのする事爲す事凡て逆に行くのはどうしたのであらうかと、十三歲で寺に入り、殆ど二十餘年佛教を學んだが、その心を平和ならしむる事が出來なかつた。そこで基教はこの心に慰安、平和を與へてくれるかもしれないと思つて二三丁行き過ぎたが、態々戾つて教會に入つた。會衆は讃美歌を歌ふて居る、ベンチに就うと思ふと、年の若い婦人は自分を窓側に導いて、團扇と聖書や讃美歌を貸してくれた。いかにも親切な取なしだと思つて、自分は、姉妹の家に歸つた樣に愉快になつて、共に讃美を歌ひ、祈禱をきゝ、說教を聞いた。會衆を見ると佛教に於ては「爺婆の集りが多いが、此處は活氣に滿ちた青年が多い。愈々歸らう

とすると、牧師と信者とは余の宿所を尋ねてまたいらつしやいと云つた。かやうな有樣を見て、いかにも佛敎と反對の傾向を現はして居るのを見て、驚いた。

△改宗の動機

やがて翌朝の新聞に大擧傳道のある由を見ると行つて見たいといふ氣になつて、神戸敎會に入つて見ると、滿場立錐の地なしといふ盛況である。宮川牧師の祈禱の精神といふので、綿密に祈禱に就て說かれ、自分は大に力と眞理とを得た。そして佛敎の中でも眞言は祈禱を本義としてし居るが、これは間違つて居るといふ事を說かれた樣に覺えて居る。よい事を承つた、明晩も行かうといふ氣になつた。次の日行つて見ると演者は西洋人で、白髮童顏を壇上に運び、壯重な日本語を以て演說を始めたが、實に一言一句心の底に泌み入る樣に覺えた。題は犧牲心と云ふのであつた。その一節を申して見れば、その宣敎師は明治七年に日本に來り、大阪より轉じて東北にキリストのお國の爲めに働いた。自分は始め日本の歷史を愛讀し、殊に英雄、豪傑、宗敎家の傳を喜んで讀んだ。そして佐久良宗五郎が佐久良の農民の爲めに磔刑に遇ふたといふ事を知つて、かねて日本人は立派な國民であると聞いたが、果して古來かゝる立派な犧牲心に充ちて居る人があつたのであらうかと感心した。また吉田松陰が「われ國難に當りて死す」と云はれて、己れを殺して、國家の犧牲になつたのを見て、かゝる國民を基敎を以て敎化せば、世界に冠絕する國民を見る事が出來るであらうとして、孜々として今日迄働いて來た。然し日本人の犧牲心は未だ狹い、日本人の精神界を一貫して居るものは、親、兄弟、主人、殿樣、國家の爲めといふ日本人の爲めに犧牲になるのみであつて、まだ他國人の爲めに犧牲になつて死ぬを得るか否かを試みた機がない。今や日本人は東洋の日本人ではない、世界の日本人である。この立派な精神を世界的に廣く發現する樣にならねばならぬ。さうするには今日のやうに宗敎心に乏しくてはだめである。神を信じ、クリストを信じなければならぬ。そしてリビングストンが人道の爲め阿弗利加の蠻地で死んだといふ如く外國の爲めに働らかなければ、その精神を發揮することが出來ない。自分の友人に米國の或學校を卒業して、有望の地位に進むべき人が、クリストの爲め

神の爲め、宣敎師となつて、支那に傳道した。北清事件に際し、死を覺悟して、妻子を國に歸した。そして砲烟彈雨の中にあつて泰然として道を説いて居つたが、危迫るや妻に遺言狀を認めて曰はく「自分は神の使命を帶びて支那に來たが、志半ばにして或は斃れなければならない。もし自分が斃れた曉には、どうか我が子を宣敎師として、再び支那の爲めに働らかしてくれるやうに」と云つたが、氏は遂に暴民の手にかゝつて斃れた。他國人の爲めに我が子に迄なほその志を繼がしめて働らくといふ犠牲心はどこから出來るか、エス、キリストの心を心とするより外にない。日本人ももしその犠牲心をエス、キリストに依て擴大したならば、必ず世界萬民の爲め立派な犠牲心を發揮して、働らく事が出來るであらうと、數千言縷々涙を以て演せられた。これ誰あらう、實に我が國より勳四等に叙せられ、昨年九月二十日路加病院で永眠されたデホレスト博士その人であつた。これ何人ぞ、われ何人ぞ、自分は日本人でしかも一旦親、兄弟、生命、財産を捨てた犠牲人ではないか、身に緋の衣を着けて居るが、果して赤誠があるか、落髮して世を捨てゝ居るが、未だ世俗の事に心が迷はされては居らぬか、實に等しく宗敎家として起ちながら、自分の身の不甲斐なさに、穴あらば入りなん思ひがして、そして博士の演説を心に繰り返へし〲考へて、その夜は一睡もせずして鷄明に達した、そして自分も基敎を學ばなければならぬと深く感じた。これが實に私をして基敎に導く動機となり、その後早速牧師に就て聖書を學び始め、その深遠な思想を味ふ事が出來た。忽ち馬太傳九章の十七節に來て「新き酒を舊き革嚢に盛る者はあらじ、若しかせば嚢はりさけ、酒もれいでゝ、其嚢も亦壞らん、新嚢に新酒を盛なば兩ながら存べし」といふのを聞いて、實に青天の霹靂と云はうか、五寸釘をさゝれたと云はうか、非常に急所をさゝれた思ひがした。新らしい嚢と　新らしい清い心と、繰り返へし〲心に叫んだ。そして基敎を研究する始め、基敎が何故熱心な信者を作る事が出來るか、その精神を研究して、落日に等しき佛敎の爲めに貢獻しやうと思つたが、今や古き嚢を捨てよとの御言を聞いてをのゝかざるを得なかつた。その時からは一層深く考へた。「義を見て爲さゞるは勇なきなり、善と知りて行はざるは罪なり」と、良心に響く神の聲

を聞く時、これに赴かざるを得なかつた。そして馬太傳の終りの方に來た時、エス、クリストの人格はこういふものであると云ふ事が分り、どうしても自分の心は神より離るゝ事能はず、ダビデの歌ひし如く「我いづこに行きてなんぢの聖靈をはなれんや、われいづこに往てなんぢの前をのがれんや」日となく、夜となく、自分の心は神にかゝつて居つた。今自分は神より離るれば永遠の滅びである、どうしても神の人となつて永遠の幸に入らなければならぬと決心を起した。

この時差詰め起つたのは生活問題であつた、他の職業ならば、それを執りつゝクリスチヤンであり得る事は出來るが、住職であつて同時にクリスチヤンである事は出來ない、自分には何一つ手に能があるのではなし、また他の職業をとつた覺えがあるのでもない。然し「先づ神の國と其義とを求めよ、然ば此等のものは皆爾曹に加へらるべし」といふ聖句に勢を得て、斷然生活問題の憂ひから遁がれた。始めは孤兒院の番人でもして聖書研究しやうと思つたが牧師からあなたは傳道すべきであると敎へられて、遂に一身を捧げて、傳道に從事する事に決心し、明治三十四年八月二十四日神戸のバプテスト敎會で受洗した。母姉の驚きは一方でない、祖先に對して濟まぬ、永年螢雪の功を積んで、一個寺の住職にまでなつたのを、一朝にして捨てゝ、また新奇巻直しの事をやるといふのは本氣の沙汰ではないとて、親類迄よつて迫害し始めた。が自分の心はそんな事に今はひるみはしない、益々聖書の妙趣に靈性を淸め、神とクリストに近づいて遂に今日あるに至つた。

△要は宗敎的生活の向上を計らんのみ

扨宗旨を變へるのはなぜ惡いか、佛敎に於ても各宗の祖師にして改宗しない人があつたであらうか、傳敎大師が天臺宗を始めたのも、弘法大師が眞言宗を稱へ始めたのも、又法然上人が始めは天臺宗であつたが、さやうな哲學的のものでは、一般の民心を啓く事は出來ないとて、念佛して上佛するといふ淨土宗を開いたのも、親鸞上人は更らに信じた丈けで上佛するといふ眞言を開き、日蓮は初め眞言であつたが天臺宗に改宗し、なは慊ずして日蓮宗を開いたのも、皆よりよき宗敎を得んとして務めたのに外ならぬ、眞如親王の如きは、畏くも平城天皇の皇子におはしながら、弘法大師の弟子となり年七十にして

眞言はむづかしい、外に必ず尚ほよき宗旨があるであらうとて、皇族、老僧、數人の從者を連れて、求めに求めて天竺に出かけ、遂に西藏の境に於て、虎口に呑まれて死なれた。我々の祖先は斯く迄盛んな求道心を持つて、よりよき宗教を求められた。その當時此等の人は世間からは敵視されたに違ひない、その親戚家族からは、愚者よ、不孝者よ、との迫害を受けたにきまつて居るが、しかも我が衷心の要求を滿足させつゝ、益々その生活の向上を斗らうとするのが宗教の本旨であつて見れば、種々の境遇の壓迫を受けて、斷乎として改宗する事能はざるは、却つて祖先に對しても、國家に對しても不忠實の譏を免れない。自分の如き、佛教の教役から基教の牧師となる等は誠に不節操の如くも見えたが、我が心は佛教に生くる能はずして、基教に救はれたのであるのに、尚は且つ佛徒として僞りの生活を送るに忍びざるのみか、これを以て天下人心を益々生かさなければならぬと決心した時、迫害もものかは、困難何のその、前途には大なる希望が輝くのみであつた。

「爾曹先づ神の國と其義とを求めよ」と仰せられた神は、實にこの希望に益々不撓の力を與へ給ふて、必ず神は物の數ならぬ自分をも、何等かに用ひて、その御用を務めしめ給ふであらうと強く信じて今日に至つた。もし日蓮上人が今日あらば、必ず我れ等の如く感じて基教徒になられたに違ひない、苟もよりよき宗教を認めたら正々堂々と之れを取つて信ずるのに、何の躊躇を要するか、要は我れ我れの宗教的生活が益々深く、高くならんことを希へば足れりといふべきである。此處に集へる方々も、多くの教師より基教を學ばれ、之れを善き教へと思ふが、祖先、家族に背くのが心苦しいと思はれる方々があるであらうと思ふが、どうか宗教の根本に突進して、その要旨を捉へ、單に之れを贊成するのみならず、之れによつて生き、これよつて歩み、之れによつて進まんやう、斷然その門を入らんと決心せんことをお勸めし度い。就ては改宗の時に當つて我れ我れ日本人の最も妨げとなるであらうと思はるゝ祖先と宗教に就て、此處に一言した次第であります

（講演大要文責在記者）

信賴の生活

今井壽道

我國臣民として昨今最深く吾々の心を苦しめて居るものは、畏くも　聖上陛下御不例の御事である。而して此事あるが爲に、吾々は、今一の大なる教訓を得つゝあるのである。

△人は遂に祈禱す

廣く我國現代の社會を見渡すに、或は陸海軍に於て、或は醫學其他の科學に於て、或は商業工業に於て、非常なる進歩を示して居る。從て國民の念中には、軍備、若しくは科學萬能のみありて、宗教の如きは、遙に時代後れのものとして度外視せられて居る樣に見える。然るに、現に、陸海軍の大元帥に在らせられる　聖上陛下が一旦御不例に渡らせられるといふ時になりて、如何に有力なる陸海軍の威光を以てするも、此御惱みを如何ともする事が出來ない。科學の力はといふと、醫學の範圍も亦限りあるものであつて、此に依て萬事を任せる事は出來ない。哲學の力亦、此には何の効能をも現はし得ぬのである。

唯、幾千萬の國民が赤子の心を以て依り賴む所は獨り、祈禱の力のみである。而して、祈禱の力の現はるゝと否とは、獨り其力を信ずるの念如何に存する。

凡そ人生には、測り知られぬ種々の災難の起つて來るもので、其時々に、人間の助け慰めともなるものは、一つならずある。然しながら、人間の最強い保護者慰藉者の役をつとめる者は、確に祈禱であるといふ事は多くの人の實驗に依つて知られる。今假りに我々が凡ての地上の富を奪はれ、快樂を失つて獨り孤獨に悲境に沈む時に、此力なき赤裸々の人間を助け慰める唯一の力は祈禱であらう。實に祈禱は靈と人との間を結合する一種の靈的接近であつて、此祈禱に依つて、達した神の國があつて初めて、現世の實在、生命といふものが現はれて來ると思はれる。

△祈禱は世の實在生命に赴く唯一の道

此實在、生命に觸るゝ點に於て、祈禱は遙に、百

般の科學に優れたものといはねばならぬ。此故に科學は、常に宗敎卽ち、神の國との交通と相俟つて進む可きものであつて、決して是のみを以て足れりとす可きでは無い。今若し人間が科學に於てのみ生存する者とすれば、丁度暗夜の中に住む樣なもので、人間生死の分るゝ所に到りては、到底地上の力を以てば如何とも解決し難い。彼の哲學は、宇宙の眞理を硏究するといふけれども、未だ、死と相觸るゝ所にまでは達して居ない。死の靈的意義に至つては、唯神の光あるに依つてのみ、照し見らるゝものである

△祈禱と日常生活

時としては、神の國を思ひ、神の光を慕ふことは人間を地上の日常生活から全く引放して終ふといふ樣な誤解を起す人がある。然し此點に關して次の樣な實驗談を或る海軍士官が年若い人に語るのを聞いた。此士官が或烈しい海戰に參加した事があつた。一體敵艦から發射された大砲の彈が、他艦を目かけて飛ぶ時には、其煙が楕圓形に見え、自分の軍艦を指して來る時には、煙が圓形に見えるものであるが或日甲板に立つた時に此恐ろしい圓形の煙を見た。それで我れを忘れて、とある物蔭に身を潜めたが、さて其瞬間に思ひ浮べた。「砲彈は自分を沈めむが爲に來るのでは無く、艦體を沈める爲に發射されたのである。若し船體が沈むならば、勿論自分も運命を共にしなければならぬ。此場合、自分は、船と其生死を共にしたものである」と斯う思ふと、急に恐怖の念は去つて終つて、直に「船體を守るが爲に我に命を與へ玉へ」といふ祈りが心の底から湧いた。是は實に生死の境に處した瞬間、基督敎徒ではなかつた未信者の自分に起つた實驗であつて、實に人間自然の傾向を示して居る。人生の意義は、經驗によつて初めて知り得らるゝものであつて、此意義を認め得た人は、一樣に、依り賴む可き或者を求める樣になる。是れは人間の力の如何に乏しいかを、表はして居り、唯、凡てを拔いて其以上の力に依り賴む事に依つてのみ暗中に一道の光明を認めるのである。地上の世界は丁度船の樣なもので、決して是にのみ依り賴む事は出來ない」と語つた。此話、此經驗に徹しても、吾々は神の國の事を深く考へて見なければならぬ。

△神のみ萬事を知し召し給ふ

實に人生の出來事は種々雜多である。而して吾々

は其意義を今直に了解する事は出來ない。ヨハネ傳十三章に、基督がお弟子の足をお洗ひになり、弟子が何故其樣な事をなさるかと伺つた時に「我今爲すことを爾いま知らず、後に到りて、知る事あらむ」と仰せらた。凡て、世の中の事は、斯うしたもので神の思召しのある所は吾々人間に卽刻知り得難い事が多い。此基督のお言は三年前迄は、私自身にとつても餘り意味深いものとは思はれなかつた。ところが、其後引續き、家は火事に遇ひ、私の外遊中、家族に三人の重病者が出來た。殊に其中の一人は、引續き長い間病床に臥した。餘りの勞苦に疲れた私は或晩神は何故に、我家にのみ斯く災難を下し玉ふかと熟々考へずには居られなかつた。丁度其處には、病苦に惱むだ子供が、すや／＼と眠つて居る。今晩讀むで居たものと見えて枕邊には、讃美歌の本が一冊開いてあつた。何の氣なしに手に取つて見ると、今も今とて頻りに感じ、考へて居つた其事に就いて「我今爲すことを爾いま知らず……」といふ言葉が見出しに書いてあつた。實に何ともいひ難い感に打たれて、其から後は、全く考も變り望ゐ變つて、神の思し召しは、今は我等には知り難いものである事を深く曉つた。

我等の信ずる愛の神は、各、異つた人間に異つた事柄を與へられる。微弱なる我々人間の力を以ては到底判斷を下す事は出來ない。唯、絶對に神を信ずれば我等の中に落ちつきが出來、神の平和を樂しむ事が出來る。個人も亦國家も共に神に依り、神を見て、此處に其平和と幸福とを求めねばならぬ。

（講話大要文責在記者）

わがたましひを　あいするエスよ
なみはさかまき　かぜふきあれて
しづむばかりの　この身をまもり
天のみなとに　みちびきたまへ
われにはほかの　がくれがあらず
たよるかたなき　このたましひを
ゆだねまつれば　みいつくしみの
つばさのかげに　まもりたまひね
わが身は全く　けがれにそめど
きみはまことと　めぐみにみちて
われの内外を　こと〴〵きよめ
つかれしたまを　なぐさめたまはん
きみはいのちの　みなもとなれば
たえずわきいで　こゝろにあふれ
われをうるほし　かわきをとゞめ
とこしへまでも　やすきをたまへ

チャーレス、ウエスレー

基督の忠婢

元田作之進

△人として神に仕ふる道

聖句に「我は是れ主の使女なり。」路加一、三八とある。是れマリヤが「我孕めるは至上者の大能我を庇ふに依る、我生むところのものは神の子と稱へらるべし」と、天使より告げられたる時に告白したる語である。此の告白、即ち自分は主の使女なりとの自覺は、基督教を信ずる凡ての人に適用すべき重大なる心理である。女子が基督の使女、即ち婢なりと感ずる觀念と、男子が基督の僕なりと感ずる觀念とは、多くの點に於て一致するものである。基督教の主要道德は男女老幼を問はず、職業、位置を論せず人間共通のものにて、男子に要求せらるゝものは女子にも要求せられ女子に重大なるものは男子にも重大である。馬太傳二十五章の始めに於ける十人の童女の譬は、忠實なる女子と不忠實なる女子との區別を示したるものなるが、其忠、不忠の行爲は、男子に取りて同一の價値を有する教訓である。又五千、二千、一千の銀を預る善且つ忠なる僕と、惡かつ惰れる僕は、元來男性に對する教訓であるが、又女性に對する訓戒ともなるのである。

△神の僕婢たるに必要の條件

第一主に忠實の者でなければならぬ。忠實なる者となるには、先づ其の主人の心を知らなければならぬ。キリストはその羊を能々知り給ふ如く、羊はその牧者を知らなければならぬ。第二には之れを人間界に見るも、忠義なる僕婢は或る程度まで沒我である。主人の目的を果し、その意志を主張する爲めには、己れを沒する。我れ我れは神の爲めには、絶對に己れを沒せしめなければならぬ。第三はその仕ふる主人を愛さなければならぬ。普通の僕婢ならば、或は愛なくとも或る程度迄は務まるかも知れぬが、基督者に於ては愛は最大なる要素である。第四は生死唯君命を待つ、進退是れ君命に從ふ。是れ忠僕の本分である。基督者は主を愛する斗りでなく、その

誠めを守らなければならぬ。第五に主人に依賴する事が大切で、基督者は先づ天國と其義とを求めば他の必要物は必ず與へらるゝ事を信じて、主に賴る事が大切である。第六に二主に見へぬ事、これは勿論である。第七は主人の爲めに苦を受くる事である。基督敎者の生涯が苦難多くとも、主の爲めに忍ばなければならぬ。第七は主の爲めに身命を惜しまぬ覺悟がなくてはならぬ。即ち主に對する我れ等の最高義務は、基督の爲めに一身を犧牲にする事である。

△女子としての神に仕ふる義務

然るに人は人として神に事ふる義務あると共に、男子は男子、女子は女子として、それ〳〵特殊の義務、特殊の性質、特殊の活動あることを忘れてはならぬ。ハンナ、モアー（Hannah More）の語に「圓形の完全なるや否やは其大小に依るに非ず、其正確なるや否やにあり」と。女子の活動する圓形の範圍は蓋し男子のそれよりも小なるべけれども、其小なるが故に不完全なるにあらず、正確なる圓形を有する以上は、神の前に於て平等の價値を有するものである。

米國費府にジエー、アール、ミルス（J.R. Milles）と云ふ神學博士がある。青年女子の敎育に多大の趣味を有し、敎育の資料に供せんが爲めに多くの青年女子に書を發し、男子青年に向つては、眞正の女性に對する理想に於て其品性の根本的要素とする所のものは何ぞと問ひ、女子青年に向つては、男性の理想とすべき品性に就きて、最も重要なる素質は何ぞと問ふた。蓋し異性のものより來る批評と希望は最も公平であり、正確であると思つたからである。問ふ人は基督敎の先輩であり、答ふる人は基督敎の後進生であるので、其答案は最も眞面目なるものであると思はねばならぬ。而して多くの答案には女子に溫順の缺くべからざることを述べて居る。曰く親切に、愉快に、而も威嚴あること、曰く談話に於ても音聲に於ても、態度に於ても、溫順にして、家庭に對しては深厚なる愛情を有し、且つ內に確乎として拔く可からざる自信あること、曰く穢れなき品性、喜悅に滿つる性情、寬大にして物に倦まざる心、勇敢なる意力を有すること、曰く思想と行爲に於て愛深く、基督と基督の敎訓を基とせる品性を有する篤實なる基督信者たることなりと。其他女德の根本要素として純潔を說くものもある、忠實を擧げたるも

のもある、殊に婦人らしき性格の眞の榮は、基督に近きことなりとは、殆んど凡ての答案に現はれたる意見であつた。

△女子として基督に近き生活

扨此基督に近き生活にして、特に女子の守るべきものは第一に美しき生活である。詩篇に「王のむすめはいとゞうちに榮へ、その衣は黄金をもて織りなせり」（四十五篇十三節）とある。内にていとゞ榮えとあるは、基督の聖旨を心に受けて、淸く美しく輝ける心を持つことである。かくの如き心を持つものは、其光外に溢れ照りて、其外部の動作をも光あらしめ、黄金の如く輝く所の生涯を造り得べきである。此美しき生涯を得るには心の曇を拂はねばならぬ。塵を洗ひ去らねばならぬ。心の汚れを淨めねばならぬ。洗ひ淨めて尙ほ之をみがかねばならぬ。雪の如く純白に、玉の如く純潔にせねばならぬ。斯くの如き生涯は實に美しき生涯である。

第二に温かき、生涯である。基督が如何なる階級の人にも、如何に親切に交り、又教へ給ひしかを心に留めて、之に倣ふことを努めねばならぬ。基督の墓前に泣きしマリヤ、或は多くの人をめぐみしドルカス、いづれも温き生涯の模範である。冷酷なる生涯無情なる生涯は、基督の婢にあるまじき生涯である。

第三に靜かなる生涯である。千尋の巖上より、降る飛瀑は、人の生命を滅すの力あるが、谿谷の間を廻る淸き靜かなる淸水は、能く人に新生命を與るの力がある。靜かなる女子の心は人に慰安を與へ、人に活氣を與へ、人に生命を與ふるのである。女子は出で丶國家の大局に當る英雄とならざるも、内にありて此等の英雄を造る靜かなる勇士である。おとなしき生涯は卑怯なる生涯、臆病なる生涯でない。靜かなる心には無量の潜勢力を蓄積し得るのである。基督の婢は斯くの如き生涯を持たねばならぬ。基督の足下にありて靜かに其教を聞きしマリヤの心には、如何斗りの愛情と熱心とを畜へ居りしか斗るべからずである。

第四に眞面目なる生活である。女子に缺點ありとすれば、虚榮心に傾き易き事である。奢侈と云ひ、嫉妬と云ふも、多くは虚榮心より來るのである。ペテロ曰く「その飾りは髪を辨み、黄金を掛け、また衣を着るがごとき外面の粧飾にあらざれ、たゞ壞る

ることなき心の内の陰れたる人、さては柔和、恬靜なる靈を以て裝飾とすべし」と。女子が外部の飾に留意せずして、心の飾に注意するならば、女子は實に天女である、身分不相應の飾は、輕薄男子を喜ばしむる事はあるべきも、眞面目なる男子の喜ばざるところ、況んや人の表裏を見給ふ神に於ておや。

第五に謙遜の生涯である。即ち弟子の足を洗ひ給ふた基督に倣ふべきである。たかぶらない生涯は麗はしき生涯である。エリサベス、ウッドイル（Elizabeth Woodville）と云ふ婦人は、名門の家に生れ、後エドワード第四世の王后となりし人なりしが、其毎日の仕事として傳へられたるものを見るに、朝四時に起き、Catherine を扱けて牛乳を搾り、六時に朝食をなし、七時に母を携へて庭を散歩し、十時に晝食をなし、十一時に食卓を離れ、一同效外に散歩し、四時に祈禱會に臨み、六時に豕と雞に食料を與へ、七時に晩食をなし、九時に寢に就くとある。高貴の婦人にして斯くの如しである。時代が異つて居る故、今日の女子に牛乳を搾り、豕を飼ふ必要はなかるべしと雖も、今日は今日の仕事があるものである。勞働は貴婦人のなすことでないなどゝ考ふるは基督の婢の資格を失ふのである。

△神に似んとする努力、慾望

我れ等キリストに似たる人となるには、常にキリストに接近しなければならない。里子は往々にして其の生母よりも乳を與へし人に似るものである。只暫時の接近にあらず、常時の接近が必要である。そして似んとする努力、似んとする慾望がなくてはならぬ。自ら求むる望の發表は即ち祈禱である。堅き決心を以て我れ等が神に近づかんは、たゞに人の望のみにあらずして、神の嚴かなる御命令である。聖書に「爾曹天の父の全きが如く全くなれ」と。これ主の命じ給ふ所である。

神の爲めに死する人は福なり、
其人は光輝燦然たる殉敎者の
冠 榮 を 得 べ し
況んや神の爲に活る人は神の前に於て
死ぬるよりも更に偉大なる勝利者なるべし。

先づ神の國と其義とを求めよ

長尾半平

△今修養會の格言

昨年鵠沼に於ける夏期學校で御撰定になりました格言は「我は福音を耻とせず」（羅馬書一の一六）でありましたが、私に是を題とする樣にとの御指圖で一場の御話を致しましたが、今年も亦御撰定になりました格言「爾曹先づ神の國と其義とを求めよ」（馬太傳六の三三）を題として話す樣にとの御命令、御歷々の諸先輩も多く居らるゝ其中で、私如き平信徒が其選に當ること、甚だ光榮ではありますが、一面甚恐懼して居る次第であります。

扨彼の有名なるイエス山上の垂訓中、馬太傳六章の十九節以下三十四節迄の間に記されてある部分の意義を概括して見ますと、第一天の財は世の財よりも遙かに優ること、第二貪ることは心を暗くするものなること、第三神と世の財とに兼ね事ふること不可能なること、第四世の財に就て煩悶することの無益にして又甚愚かなることゝ云ふ四ケ條の敎訓を垂れられたものゝ樣に見えます。即ち今期修養會の格言に選定せられましたのは、其第四條にして、世の財に就て煩悶することの無益にして、又甚愚なることを敎へられつゝあることであります。

△生活難と靈的修養

我國の現狀を察しまするに、物價の暴騰、隨て生活難の叫びは細民の間計りでなく、到る處に喧い樣であります。故に頃日は一層の强さを以て先づ吾等にパンを與へよ、衣食足りて禮節を知るものなりと云ふが如く、恰も格言の主旨に反對の叫びを耳にするのであります。此叫びが基督者ならざるものゝ間にのみありとすれば、敢て深く尤むることも出來ないのでありますが、基督者間に於ても往々此叫びに耳を貸すのみか、躓くものゝ最多くはイエスの此御敎訓に反對の結果であると云ふに至つては、由々敷次第と云はなければなりません。而して人間の有する此肉體卽ち早晩再び元の土に歸すべき部分には

相違なきも、苟も靈の這入つて居る間は立派な宮殿で靈と共に等しく神より與へられ——或意味よりはお預り申して居ると云ふ方が寧ろ適當かも知れません——たるものでありますから、其御用に供する衣食、住の三要求、固より決して無用處ではない、イエスも決して之を無視せよとは敎へて居られませんが、兎角人間は物の本末輕重を誤り、假令ば此處に敎へられてある通り、生命よりも糧を身體よりも衣を優れるもの丶如くに誤解するからであります。イエスが模範的祈禱を示されました内にも、吾等に日用の糧を今日も與へ給へと祈るものと敎へられてありますが、併し天に在す我等の父よ、吾等に日用の糧をとは敎へられません。第一に御名をあがめさせ給へ、御國を臨らせ給へ、御心の天に成る如く、地にもなさせ給へ、即ち神の名を讃美するもの丶增加し、地の上には津々浦々に至るまで、神の御心を悅ばせ奉るべき神の御司配が擴張せられ、御榮のいや增さんことを祈り求めて後、換言すれば「先づ神の國と其義とを求め」て、而して後にあらざれば、肉の要求を許させ玉はぬのであることは、炳として日星を見るよりも明瞭に了解出來るのであります。

此格言は單に今年の修養會の題目と申しますよりも此世に存在する間の修養の題目と申してよからうと思ふので、而して修養とは斷えず此格言に反ては居らぬかと、自分を省みつ丶進んで行くプロセスを申したものと一面より申して差支へないのであります

△修養には時と處を撰はず

扨此修養でありますが、これは何時頃から用ひられたる文字であるか不明であるが、今日では品性、人格等の文字と相幷んで、離る可からざるものとなつた樣に見えます。兎に角一定の文字が充てはめらる丶と、其處に區別的説明が出來て、遂に狹き意味に限定せられて、其本來の意味を輕減せらる丶傾あるは免る可らざることと考へます。古來偉人とも云はれた人は何れも每日か或數日間には、必ず區別されたる時間と場處とを得て、品性、人格の修養に腐心した事は、傳記等に多く見る處であり、イエスもヨハネより洗禮を受けられ、メシヤとしての重大なる任務を自覺せられた時、荒野に於て四十日夜の斷食を以て大に修養せらる丶處あり、又其他の場合に於ても屢々靜かなる處に、靜かなる時を求められつ丶ありし事は聖書記者の話す處であります。吾等は

常に偉人を敬し、イエスを慕ひ、其御足跡を蹈まんと心懸くるものは修養の爲めには、猶更以て相當の區別されたる時間と場處とを必要とするのは當然のことでありますが、其區別されたる時間と場處とにあらざれば、修養が出來ぬか、又夫でなければ修養にあらざるかと云ふに、本來の意義に於て決してさういふものでなからうと思ふ。どうも人間の考へと云ふものは、偏り易いもので、假令ば身體の營養に對して食事をとるのであるが、さうすると三度の食事だけが營養の樣に考へて、朝から晩迄無代價で呼吸させられて居る空氣のより大切であることを忘れて居ると同樣に、閑靜なる山中や、寂寞たる荒野に於て、唯獨り沈思瞑想に耽つて居る時計りが、修養であると云ふ事は出來まいと思ふ。人類の生存競爭は日一日より甚しくなり、優勝劣敗强食弱肉と云ふ有樣にして、物質的文明は弱者を呪つゝある今日周圍の用務は益增加し、多忙は多忙を生みつゝある今日に於て、區別されたる時間と場處とを見出すことが益困難になつて參りますが、若しさうでなければ修養以て人格の向上を期することが出來ないとすれば、是甚だ困つた次第であつて、此物質的文明も多忙なる業務も同じく神より與へられつゝあるものとすれば、或意味よりは神樣も隨分御無理なお方と申上げねばなりませんが、幸にも神は時間と場處との限定なく、あらゆる機會に於て修養を促がし給ふが故に、昨日よりは今日と少しづゝなりとも向上發展して行けることを喜ぶものであります。歐米何れの國へ參りましても、敎會堂は多く最繁華雜閙を極めて居る市街の中心に建設せられて居ります。又神はポーロの改悔に當り、寺院に行けとも、山林人靜かなる處に修養すべしとも命ぜられず、當時最繁華なりしダマスコに行け、其處にて示さるゝ處あらんと、云はれましたなどは、大に味ふべきことゝ信じます。併し私は決して此區別されて與へられたる夏期修養會、而もかゝる場合に在りては最よく自然に接し、最よく人に近つき、最樂しく有益なる機會を中々以て無用などとは申しません。のみならず尙り其の必要なるべきことは、身體に對する三度の食事の如く考へて居るのでありますが、唯私は限定されたる狹き意味に解釋されますことは、往々にして其本來の意義を沒却するものであると云ふことを深く御承知願つて置度いのであります。

△人は非常に際して覺醒す

若し日清戰役とか日露戰爭の時計りが我國の危機であり、眞面目の戰爭と考へ、平生の日に於てより重要なる平和の戰爭が時々刻々に戰はれつゝあることを忘れるならば、直に國力の權衡を失し、我國家は衰ふるの外はないのであります。敎會堂に於て名士を聘して說敎會を開き、讃美歌を歌ひ、聖書を讀む時計りが傳道と心得まして、基督者は世間の人より讀まるゝ聖書であると云ふ意味を忘れまするならば、傳道の効果も覺束ないのであります。既に時と云ひ處と申しますと、其長短とか遠近とか云ふ考へが伴つて參りますが、修養の効果には時の長短、處の如何は關係ない様に思はれます。私は先日私と同じ役所に居り、九死に一生を得て歸朝しました細野君より、タイタニック號沈沒に關する實況を聞きましたが、一人の日本人たりし同君計りでなく、歐米の有名なる學者も、一人の身體に五百萬圓の裝飾を纏ふたる富豪も、其最も急なる、最も迫れる場合に立つて受けたる敎訓は、とても平時に於て得られぬものがあると申します。又は戰場とか或は最も親しきものゝ危篤の病床に臨み、人間死生の分岐點に於て高度の苦痛を經驗したるものは、平時の幾百時間にも增して得難き修養の効果を收むる事の出來るものであります。彼の十字架上の一人の盜賊が、臨終の際に於て天の樂園に受入れられたるも、慥に其適證たるを失はぬのであります。故に政治家としても實業家としても、敎育家でも、軍人でも、學生でも、勞働者でも、男でも女でも、日々夜々其授けられたる業務に從事して居る間に、時間と場處との限定なく、其事業及周圍の事々物々より修養的營養分を吸收して行くこと、恰も食物が腸を通過する間に、身體の營養分は悉く吸收せられて仕舞ふ樣にして行かなければならぬものと信ずるのであります。

△靈眼を開いて視る社會の現象

扨如此大に養ふものは、次て大に活動せんとする所以でなければならぬ筈でありますが、イエスが汝等は朝やけ夕やけによりて、天の陰晴をトすることを分別するの力ありて、時の休徵を識る能はざるかと詰問せられましたが、此時の休徵を識るの力、イエスと面のあたりお話をして居りながら、其誰なるを知らず、汝と語る處のもの、卽ち是なりと云はれて、始めて吾主よ、吾神よと跪き拜する樣なことで

は、ちと遲いが、兎に角神を觀、神の意を悟ることの出來る力を以て、今日吾々の周圍を見廻したならば、如何なるものが吾々の眼界に映ずるか。

昨二十八議會には議會開始以來、珍無類の二つの建議案、即ち其一は切腹を刑法の中に加ふるものにして、罪の狀情によつては絞罪に處せずして、切腹を申渡さんとするもの、他の一は古來大和民族の特技たりし刀劍の鍛冶法を存續保護して、以て其に頽敗せる士氣を振興し、國家道德を維持せんとするもの、之等二案とも事柄は甚だ滑稽に近しと雖、かゝる建議を思出さしめたるものは、如何なる現象なるか、

今春三敎會同の事ありてより、其後各種の協會即ち三敎會同の意味を繼續する大日本宗敎協會、或は敎育勅語を奉體して、國民の思想の統一道德の振興を期せんとする斯道會等、此種の團體の續々誕生するのは、如何なる現象なるか、

或は又不良少年少女の檢擧、實に其數多き、其性質の恐るべき、悲痛の外はありません。殊に良家の子女が多きに居ると云ふに至つては、一層の驚きを以てながめなければなりません。然し今日に於て別段の制裁がないから幸な樣なものでありますが、若し不良青年、不良老年、男女の檢擧を致しましたら、更に一層の驚くべき事實を暴露するであらうと思はれますが、是は如何なる現象でありませうか。

又昨今米價の騰貴、生活難の叫びは其極點に達し小學校生徒にして完全に、否不完全にも三度の食事をなさゞるものすらあるに至つたことは、屢新聞紙上に見る處でありますが、其源因は大藏大臣の之に對する意見なりとて世間に傳へられたるものもありましたが、之は低利資金の貸出により、農民に餘裕が出來、米を貯藏して置くもの多くして、市場に出てたる米に不足するも其近因とのことでありました此處に居らるゝ皆樣方は米の相場などを知つて居られますまいし、又かゝる御研究をなすつた事も御座いますまいから、序ながら少しお話を致しませうが私は遺憾ながら大藏大臣の說には一致することが出來ないので、成程貯藏米のあることは事實に相違ないが、僅か計り振りまかれたる低利資金貸出の影響ではなくて、農事改良の結果、米質が非常によくなり、以前の樣に腐敗の心配もなく、長く貯藏に耐ゆるのと、一つには米價の騰貴は其日暮しの勞働者な

どには災難であるが、農民に取つては好景氣なので彼等はかゝる場合には、優に之を貯ふる力が出來るのであります。第二の原因は米が大體に於て不足であると云ふことであるが、人口一人の年平均一石とし、之に副食物の分量を差引すれば、年五千萬石の產額必ずしも不足とは申されぬのであります。併し玆に人爲的に益不足ならしめつゝある事實があるといふのは、毎年四五百萬石の造酒の關係であります今一石の玄米より一石三斗二升の酒を造り得るものとすると三四百萬石の米をつぶして、僅に喉元三寸を濕すに足る百毒の長たる毒藥――此大切なる身體と精神を衰亡せしめつゝある細民の敵國民の仇である有害なる液體を製造しつゝあるのであります。禁烟室に在つて喫烟する亂暴者があつたならば、貴婦人は必ず之を詰責するか、或は直に席を蹴て起たるるでありませうが、此席に御出になる皆樣方の内にはかゝる恐ろしき惡魔、毒藥を神聖にして春風和氣藹然たるべき家庭内にお入れになるのみならず、不見識にもお酌などなさるはまだしもとして、御自分の最愛の良人に御侑めになる如き不人情な御方はあるまゐと信じます。政治家は酒造稅六千萬圓を虎の子の樣に大切なるものとなし、禁酒論に反對して居るものすらある。此六千萬圓は誰が拂ふものか、天から降つて來るものでも、地から湧て出るものでもない、皆此毒藥を飮まされつゝある不幸者が、酒屋に拂ふて、酒屋が之を政府にお取次する迄ではありませんか。國民の生產力を減少せしめ、犯罪者を製造せしめつゝ得たる六千萬圓、徐ろに其利害得失を打算せば、思ひ半ばに過ぐるものあらん。以上は如何なる現象を意味しませうか。

又最近には吾々が敬愛し奉る　天皇陛下の御不例六千餘萬の赤子至誠の熱淚を以て、其御平癒の一日も速かならんことを祈らざるものはないのでありますが、顯要の地位に居らるゝ御方々の內で、或は明神樣や山王樣へ長き祈禱文を捧げて祈願をこらし、或は又地方などでは鎭守の社、其他の神社佛閣に百度詣をするなどは申す迄もなく、某郡會議長は電報にて神樣へ祈禱文を送つたとか、或は航海中の某汽船にては、船客一同甲板上に跪いて、東京の方に向て禮拜したとか、其他二重橋外に於ける群衆の景況等、臣民熱誠の發顯する處の各般の狀態、擧て數ふ可らざるが如し。而して彼等の多くは平生宗教的信

念など云ふものには極めて冷淡でありまして、甚しきに至つては其何物たる確信もなき無頓着の連中であらるゝ様ですが、事此處に至りては身自ら　陛下の御側に侍することもなりがたく、又醫薬と云ひ、御看護と云ひ、殆んど人事のベストを盡して在らせらるゝ、夫以上の方法も案出することも出來ず、去りとて安神も致し居られず、夢中になつて誠意あつたならば天神地祇何れかにて受けて下さることもあらんと云ふ立場に在るものと言はなければなりません。吾々宗教家の見地より見れば迷信家の所爲に近きものが多いのでありますが、是決して冷靜に批評を試みたり、又は輕々に看過すべきことではなからうと思ひます。卽ち人間靈性の内に具有する宗教心の發顯でありまして、大に同情を表し、敬意を拂ふて、ポーロがアゼンスに於て。「吾汝等が識らずして敬ふ其ものを汝に示さん」とて、熱心に福音を傳へましたが、吾々は同じ决心を以て其責務を感じなければならぬ様に思ひますが、皆様方は是を如何なる現象となされまするか。

△事々物々は神の課題

如此は吾々の周圍に起れる注意を拂ふべき二三の事實に過ぎないのでありますが、日常吾々の家内に在つて、或は毎日取つて居ります業務に伴ふて起る處の事實を捉へ來て綜合致しまするならば、事々物々凡てが直接間接に吾々に神より課せられたる問題ならざるはなしと申してよからうと信じます。吾々は此間に修養的營養分を吸收しつゝ、其大に養て得たる處のものを以て、大に活動奮闘しなければならぬ現象は、皆様方の前に置かれてある様に思ひます

人あり事業を誠實になして成効し、
　同胞に對して深切に、家庭に於て貞節に
思慮深く寛大にして高尚なる道德の
　標準に從ふことは社會に於て成効し
　　又大なる名譽を得るなり。
然りと雖も若し永遠の生命の解釋として
　品性を修養し神に對する關係を善く識り
出來得る丈けの心靈的發展をなすことに
　失敗する者は其の人の名譽は如何に高く
輝くとも其の傳記に「されど彼は
　永遠に活ける心靈としては失敗したり」
　　と誌されざる可らず。

ハーヷード、アゲニウ、ジョンストン

靈的修養

其の一

宮川經輝

「人の中に靈あり、全能者の氣息人に總明を與ふ」――約百記三十二章八節

△心意ある人間

十八世紀より十九世紀に亘り、世界は科學萬能を稱へ、爲めに自然界の學問は俄に進歩した。例へば星學に於ては、我等が俗に稱ふる三千世界、十萬億土等の言の直ちに眞理なるを示し、顯微鏡の發明は極めて少量の水中にも幾萬の小動物の生活せるを見せ、水中にも亦廣き世界の存せるを指示した。プリズムの世界も亦人に多大の驚嘆に値する事を敎へ、人は事毎に自然界の偉大なることを敎へられて、人心は萎縮し、遂に此處に唯物論なるもの起りて、無神無魂を稱ふる者が出るやうになつたのである。現今五十歳前後の學者の腦中には、この唯物論の思想が先入主となつて居る。余が二十歳前後の時、米國からモールスなる人來りて、盛んに無神論を鼓吹した。其流を汲む人は現に我が國學者間には多い。加藤博士などは或はこの人の弟子の一人であるかも知れない。

西洋に於ては最近三十年間、心理學の發達はめざましきものであつた。ハルバルト大學敎授ゼームス氏、クラーク大學敎授なるホール、ライプチヒ大學のウント敎授等は、熱心に心理學を研究し、その結果自然界の偉大に一度壓倒せられし人間の中には、自然以上の或物の存在するを發見するに至つた。敢へて問ふ、自然界に理想ありや。あゝ理想なるかな、理想なるかな。之れ眞に偉大なるものである。凡そ人としてこの理想を有たない者はない、理想は恰も富士に登るが如くである。「富士の嶺の上はあらじと登り來て仰げばいゝと高き大空」と云ふ歌にあるやうに、理想は無限に高いものである、王侯貴人の位もものゝ數かはである。犬猫には理想なく、人のみ之れを有して居る。

次には人間に思想といふものがある。プラトーの

科學思想、ダンテの神曲、ゲーテのフアスト、之れ等の裡には人間の偉大なる思想が潜んで居る。人間を壓倒せし科學思想も亦人の考へ出せしものではないか、人間の思想は日進月歩して止る所を知らない實に不可思議の力を有するものである。

此處に人間の愛といふものがある。之れは如何であらうか。鳥獸も亦愛を有つて居る、然し彼れ等の持てるは單に本能的の愛である、人間の愛は決して一時的また眼前の物に止まらぬ。此處に二人の人あり、相會して友となつたならば、この二人の愛は卽ち無限の時を意味するのである。ダビデとヨナタンの友情の永久的なりしが如く、靈の友と會して新る時、我が靈は彼の靈と合して、此處に永久的の活動を生ずる。この最も不可思議なる愛を我れ等は宿して居るのである。

扨永久の意義は如何、余は今諸姉に何等かを語り居るを意識す、之れ現意識である。「愛する」とは五年十年を意味するに非ずして、永久にかけて愛するのである。「生くる」とは只瞬間の感ではない、我れは永久に生くとの意識がある、理想、思想及び永久の愛、永久の生命を裡に潜まする我れ等は偉大なるものである。

△靈的生命の自覺

近來諸氏は種々なる雜誌や書物にて、オイケンなる名を見らるゝであらう。彼の近著「宗教の眞理」といふ書が、英譯にて出版せられ、余も之れを一讀する事を得て、私かに會心の笑を洩した。同書の百五十頁に、「人の裡に有る靈的生命は若しそれが單に人間のものなりせば、自然の力に反して發揮することを得ず」とある。余は今我れ等の裡に有る自然以上のものとして、理想、思想、愛、生命の四つを數へた。オイケンは我等の靈的生命の後には、より以上の生命――力――の加はれることを示して居る。同書の二百六十頁に「宗教は人の裡なる神的生命の存在に基く、而してこの神的生命を我がものとして捉ふる事に依つて生ずるものである」と。又曰く「人が其の存在の根底に於て、神的生命まで引上げられ、而して神的性質に加はるものである」と。之れ卽ち神の性質を我が一部となす事である。右は現今持て囃さるゝオイケンの思想である。

然し此處に眞に驚くべき偉大なる書物がある。それは卽ち聖書である。獨のフイヒテーの「幸福なる

生命に至るの道」も亦偉大なる書物である。而も此書の白眉と稱せらるゝ第六章は、約翰傳一章一節より五節までの解釋に外ならずといふに至りては、我れ等は益々聖書の偉大なるを感せざるを得ない。オイケン出でゝ唯物論に支配せられ居りし世界を叱咤した、牧師神學者は手を擧げて彼れを迎へた、而もこのオイケンの說く處、また約翰傳を哲學的に說きしに過ぎず、オイケンの哲學は約翰傳の說明に外ならぬ。余はこの靈的生命の存在を自覺す、而して過去に於てこの貴き生命を正しく養ひ來らりざしを悔い今これを養ふの要を切に感ずる者である。修養とは世の多數の人々の屢々口にする言葉である。然れども何にも代へ難き宇宙の萬物を超越するこの力を自覺せざれば、眞の修養は不可能である。一度この力の存在を悟らんか、外部の紛飾はまこと無益なるを覺ゆる。我れ等は內部を最も淸く高く磨き養はなければならぬ。「神は靈なれば拜する者も靈と眞をもて拜すべし(約翰傳四〇二四)」眞に偉大なる言葉である。而も我れ等は幾度之れを讀み過したであらうか

△神の靈

余は今靈的生命卽ち魂の存在を叫んだ、然し我れ等若し魂よりも猶大に、限り無く深奧なるものゝ存在を認めなければ、向上發展は不可能である。「神は靈なれば拜する者も亦靈と眞とを以て拜すべきなりと。この靈とは卽ち我れ等の裡なる靈的生命である。神と我が靈とは同種類のものである。只一は無限に大に、無限に深きものである。此に於てか之れに結び付かんとの熱望を生ずる。ダビテとヨナタンの魂は結著した、甲と乙とが友となりて、意氣投合する時、甲の魂は乙の魂の中に入りて、この兩者を判する事能はざるに至る。甲の魂は乙の魂を念じ、乙の魂は甲のそれを念ず、距離は全く沒却せられ、甚しきは兩者の魂が實際相通ずる事さへある。我が心と神の心と相通じて、常住坐臥神を思ふを、靈をもて神を拜すると云ふのである。提灯と釣鐘は合はず。福音書によりて見るに、キリストは神を「我れ等の父よ」と自ら呼び給はずして、「我が父、汝の父」と云ひ、又弟子と共に集りて祈り給ひしをも見ないのは何故であらうか。キリストの心は天の如く高く、弟子の心は地の如く低かりしが故に、相通ずる事が出來なかつたのである。若し我れ等の心、神と通ずるに非ざれば交通は不可能である。

△クリストによる再生

人間の靈的生命は、罪科に依りて萎縮した。約翰傳三章に於て、エスはニコデモに向ひ再生を説き給ふた。再生とは上より生るゝ事である。天の力の我れに加はりて、罪惡の力にて萎縮せる我れ等の心を啓くに非ざれば、神と通ずる事は出來ない。ニコデモは驚いて、再生の意義を問ふたるに、エスは「風は己がまゝに吹くにその聲を聞けども何處より來り何處へ行を知らず凡て靈に依りて生るゝ者も斯くの如し」と示めされた。約翰傳十二章三十二節に「我若し地より擧げられなば、萬民を引きて我れに就らせん」人の魂を救はうと思ふならば、先づ其の人を滿心の愛を以て愛せなければならぬ。余の友人が傳道の秘訣を説きて「我が愛せし人は皆救はれたり」と云つた。愛の力に抵抗し得る者はない。キリストは「我れ若し地より擧げられなば、萬民を我に就らせん」と、仰せられた。キリストの愛は變り易きペテロをも捉へ畢りぬ。このペテロはキリストの聖名の爲めには、生命をも惜しまなかつた、之れ何の故であらうぞ、外ではない、愛に引かれたのである。我れ等は再生して天の愛に引かれ、エスの爲めに己れを磨かなくてはならぬ。エスと交るに足る性格を作らなければならぬ。エスの最後の祈に「汝の眞理をもて彼れ等を潔め給へ」とある。ヘルモン山上にて聖顏の輝きを增せしキリスト、この靈化せられしエスは、其の潔められし身を以て弟子達を靈化した。我れ等若し俗惡なる徒と交れば必ず自らも俗惡となる。之れに反して潔められしエスに接觸せし弟子達は、いかで潔まらぬ事があらうぞ、まして主自ら彼れ等の足を洗ひ給ひしに於てをやである。

△靈的交際

たゞに靈的生命の存在、其後ろに潛める神のみならず、靈なる神を靈をもて拜する大我と小我の結着を敎ふるは約翰傳である。約翰傳の敎理解釋は卽ちオイケンの哲學解釋である。靈的生命の解釋は決して難事ではない、哲學者も無學者もこの生命の解釋に於ては一致する。英國のジョン、バンヤンは賤夫であつたが、一日商用の爲め他に行き、三人の老婆が靈的生命に就き語れるに聽き入りし時、初めて自己の汚れを自覺し、清き生活を熱望するに至つた。余曾て余の敎會の婦人會にて七十餘才の老婆にあふた折に「お祈りをなさる時の感覺はどんなものなる

ぞ」と尋ぬると「私は祈る時神樣の御威光に打たるゝやうに覺えます」と、余はその答への餘りに自覺的なるに驚いた。また中年の女に同じ問ひを出すと「感情の縺れが常に絶えない苦しい私の家庭に在つて、私は祈る時不思議な力を感じます」と。かやうに何人も靈的生命の存在を自覺する事は同樣である。諸姉早朝美しき海邊に膝づきて、靈と眞とをもて祈られよ、必ず今迄に得ざる靈的生命を得る事が出來るであらう、而して諸姉の顏の輝きと、其の聖化されたる人格とは、必ず友人等を驚かすに足る物があるであらう。靈の修養は外部に在るものを探る事ではなくて、既に存在するものを養ふ事である、若し其の精神燃ゆる處あれば、必ず得らるゝものである。

靈的修養

其の二

「あゝ神よ、しかの溪水をしたひ喘ぐがごとく、わが靈魂もなんぢをしたひあへぐなり。わがたましひは渇けるごとくに神をしたふ、活神をぞしたふ。何れの時にか我行きて神のみまへに出でん。」――詩四二〇一―二

△宗敎の眞髓

佛蘭西の神學者サバチイエが其の著「宗敎哲學概論」の中に「宗敎とは心の祈りなり」と申した一節がある。言葉は極めて簡單であるが、その含畜を考へて見ると、いかにもよく宗敎の眞髓を云ひ現はしたる言葉であると思はれる。宗敎と云へば、我が日本では多く加持祈禱をもて病氣災難を逸れる事の樣に思ふ。また多くの基敎信者も亦基敎とは單に酒や烟草をやらぬ事とか、近頃では孤兒院とか其の他の慈善事業に奔走するの謂ひに思ふが、それは宗敎の眞髓から申したらほんの副產物に過ぎない。宗敎とは人と人との關係の謂ひにあらずして、神と人との關係を云ふのである。我が小さき狹き心を啓きて、神の心に結び付くその佳境に達するには、實に祈るにあり、心の祈禱が宗敎の全體であると云ひしは、いかにも要を穿てるものと思ふ。曩に朗讀せる詩篇の四十二篇一節二節は、一面人が神に對する切なる眞情を云ひ現はしたものである。鹿が溪水を慕ひ喘ぐが

如く、我れ我れ人間も何かより以上の力を頼まずしては止まぬものである。昔舜といふ聖人が父に苦められ、弟に窘められ、世界廣しと雖五尺の體軀置く所なき悲境に陷つた時に、旻天に父母に號泣したのも、梅田雲濱が、妻伏病床兒泣飢の詩を歌ふたのも是れ心の祈である。今回聖上陛下の御重患を拜聞して、我れ等は只赤誠籠めて神に祈るの外を知らぬ實に此の場合我が心を知れるは天の父ならずして誰れあらう。この眞情こそ卽ち宗敎心と申すべきもので、この心が祈禱心の根底である。ゼームス敎授は、人間には第六の官能がある、第六の官能とは信ずるといふ事であるとは、やはり人間の心の情を云ひ現はしたのである。

△祈禱の對境

旣に人間には信ずるといふ心情ありとすれば、父母を戀ひ、友を慕ふのは當然で、その戀慕の情を滿足さするに足る對境がなくてはならぬ。父母居まさずして、戀しき心はいや增すその時に當り、父母に代りて孤兒を眞に愛育する者があれば、のび〳〵と育つのである。人間の心靈もこれと同じく、常により大きく、より高く、より淸きものを望みて慕ひ求めて居る。もしこの心に對して印度人の說く大梵天卽ち至大至高にして人間より遙かに高き超越の神であつたならば、我れ等は之れを畏敬するであらうが我れ等は父よ母よと慕ひ求むる心を滿足さする事は出來ない。われ等の求むる神は超越の神にして、同時にまた內住の神である。その神ももしユダヤ人の云ふ正義一片のものでましましたならば、罪多く汚れたる人間は、その御前に於て只畏縮するより外はない。私共が慕ひ喘ぐ神は慈愛の神である、情け深き神である。無限の慈愛と正義とを湛へ給へる神である。「天にまします我れ等の父よ」とクリスト自身が呼び給ひし父なる神である。使徒ポウロが「爾曹が受し靈は奴たる者の如く復び懼を懷く靈に非ず、アバ父とよぶ子たる者の靈なり。(羅馬書第八章十五節)」と云つて居るアバ父よと呼ぶ神である。此處に基督敎の祈禱の秘密は云ひ現はされて居ると思ふ。

△余が祈禱の實驗

此處に私の小さい實驗を申す事を許さるゝならば少しく述べて見たいと思ふ。私は祈禱程嫌な事はなかつた。敎會に行つても人の祈禱をするのを聞いて

もう止めてくれゝばよいと、幾度も頭をもたげ、こんな苦痛な事はないと思ふた。然るに一日友に向つて君は長く祈るかと問ふた。僕は時計を見て祈つた事は無いから知らぬと云ふた。そこで友は祈禱に就て語り聞かせた。祈禱は幼兒が母御の傍に行く樣にまたお父樣と申して、心に申し度いと思ふ存分を述ぶればそれが終りである。もし大層疲れて祈る元氣もない時は「今夜は祈りたいが、疲れて祈る元氣がありません、どうぞよろしく守り玉へ」と申せばよろしいと云つて呉れた。私はその經驗を聞いて、實にそれが眞の祈禱であると感じた。徒らに言葉を作り飾つて、謂れなき事を申すのは、決して天の父の喜び給ふ所ではない、お父樣と眞情を以て語るそれが祈りの眞相であると悟つてから、非常に祈禱と云ふものが好きになつた。それから祈禱會等に出づる事が興味あるやうになつた。それは多くの祈りの中には耳に栓をしたいやうなのや、またアーメンと云ひ兼ぬるやうなのもあるが、然し實に無邪氣な、眞底より湧き出づる言葉を以て我れよりは神を慕ひ、神はまた無限の同情を有してこれに耳傾け給ふといふ信念ある祈りは、眞に美はしく滋味あるものである。この信賴と信念あるによりて祈禱はなし得らるゝのである。イザヤは「エホバの道は天の地よりも高きが如く高し」と叫んだ。然しその高き神と低き人間とが交れぬものであらうか。私は常に六歲になる私の子供と交つて居る。子供の書齋に來つて私の膝の上に居る間、我れも子供も餘念なく語り戯れて居るのである。勿論六歲の幼兒と私とは智識の點に於て學問、實驗の程度に於ては、渡るべからざる逕程がある。然し子供には父を心より慕ふ念慮あり、父には子供が可愛いゝといふ愛情があるので、五十の差ある年を忘れ、境遇を忘れて相交はる事が出來る。神と我れも丁度斯くの如き交りであつて、もしこれが超越の神、正義の神であつたならば、到底小さく低き人間は傍らにもよりつけぬのである。

△祈禱の心構へ

射を試むる時には、姿勢をきめて的をねらへば、打當る事が出來る。祈禱も亦心構へがなくてはならぬ。天迄達する心構へを持つ事が大切である。これに就て二三の性質を論じて見やう。

路加傳十章三十八節以下にマルタ、マリヤの事が書いてある、主エスがベタニヤのマルタの家に越さ

れた。座敷に入り給ふた時、妹のマリヤは其處に座つて、玉の唇より洩るゝ言葉を一心不亂に聞いて居つた。マルタはイエスを饗應しやうとて臺所で忙しく立ち回つて居つた。もう妹のマリヤが來て助けそうなものよと思ふが、なか〳〵來ない。そこで「主よ我が姉妹われを一人遺て勞働しむるを何とも意ざるか、彼に命じて我を助けしめよ」と云つた。然るにエスは「マルタよマルタよ、爾多端により思慮ひて心勞せり。然ど無て叶ふまじき者は一つなり。マリアは、既に善業を撰びたり。此は彼より奪べからざる者なり。」と仰せられた。マルタは常識に富み、氣轉が利く性質であり、マリアは一心不亂になり易い、靜かな性質であつたらうと思はれる。マリアこそ祈禱の妙味を味へる性質であるが、マルタは然らず、活動的でよいが、宗敎の奧義には達し難い性質を持つて居つた。然しマルタも多年修養の後には多分妹のマリアに劣らぬ神との交りが出來るやうになつたであらう。またヨハネとペテロとは無二の友であつたが、ペテロは氣早な活動的の人であり、ヨハネは雷の子と云はれた丈けに、噴火山的の性質を帶びて居つた。卽ち適々噴火する時は非常な勢であつたが、靜かな時は、また思ひ切つて落付いて居る。それ故祈禱の妙境に入る事が出來たので、約翰傳のやうなものが出來た。ペテロはどうも祈禱には閉口した、中々祈りが出來なかつたので、苦しんで人一倍修養したので、非常にまた進歩した。使徒行傳の十章の九節を見ると「ペテロ祈禱のため屋上に升れり、時は約そ十二時なりし」とある。ペテロは晝の十二時頃屋根に上つて祈つたと見える、これを見ると同情に堪へない、ペテロの如く活動的の人であつたから、下に居つては何か氣が付くから、人の居らぬ屋根に飛び上つて、靜かに祈つたといふは、いかに修養に務めたかゞ分る。私も紅塵萬丈の都に住んで居るので、人の顏が見えず、人の聲の聞えぬ場所に於て祈り度いと思ひ、半日探したが遂に得られなかつた。そこで家族のまだ床を離れぬ朝まだきが一番よいと思つて、久しくその時を祈禱の時間として居る。マリアの如き人ならば、隣で話し聲がして居つても祈りが出來るであらうし、ヨハネの如き人は道を歩きながらでも祈る事が出來やう。然しマルタや、ペテロの如き人は苦しき修養を積まなければならないが、その結果精神の統一が出來て、神と交

る事が愉快な幸福なやうに覺ゆるに至つたであらう。その祈禱に非常な經驗を積んだペテロは彼得前書五章の八節に、祈禱の心得を示した。「謹愼儆醒、なんぢらの敵なる惡魔吼る獅子の如く徧行て呑べき者を尋ぬ」とある。謹愼めと云ふ言、之れは祈禱の心構への第一である。支那譯には端正と書いてある。端は正しく、正も正しい。祈禱する時寢ころんでも、趺坐かいても出來ぬ。正座するか、立つか、形は心の表はれであるから、姿勢を正しくすると共に、我が心を正しうして眞直なる一筋の心を以て、神の聖前に起ち、儆醒の態度をとらなければならぬ。儆醒は支那譯には自制と譯してある。エスがゲッセマネの祈り時、三人の弟子に目を醒して居れと仰せられたるにも拘らず、皆居睡りをした。エスは之れを見て非常に嘆息された。エスが四苦八苦の苦しみをして居らるゝのに、その戒めの一言さへも弟子達は守る事が出來なかつたその不甲斐なさがペテロの心魂に徹して居つたから、自制しなくてはならぬと云つた。祈禱する時は飲み過ぎても、食ひ過ぎても、咽喉が乾き過ぎても、空腹が過ぎても、寒を覺えても、暑さに堪へられなくてもいけない。しづかなる所に入ると共に、我が身も凡て不安の狀態なく、惡魔の來ない樣に心構へしなくてはならぬ。今夜が祈禱會と云ふ日に、くだらぬ三文小說や三面記事を讀んだり、つまらぬ話に耳を傾けたりする事なく、瞑目して考へ、聖書を讀み、目に惡しき色を見ず、耳に惡しき聲を聞かず、今夜の祈りに就て準備したならば、いざ祈らうとする時は、丁度焰が集まつて焦點を作る如くに、私共の祈りは神の心に徹底する事が出來るやうになれる。

△祈禱の本領

祈禱の本領は靈の交りである。多くの人は祈願であると思ひ、下さい、下さいとのみ申す。親子の間柄は親子の交りが本領にして、決して物を强請る事が本領ではない。エスが山に上つて、夜もすがら祈り明かされたといふが、決してエスが下さい、下さいと申されたのはでない、天の神と靈の交りをせられたに外ならぬ。ルーテルが日に三時間祈つたと云ふがその聲を聞けば、恰も友と話せる如くであつたといふ。天の父との交り、靈の交りの中には、聖書を讀む事も加はるのである。聖書の中に神の聲を聞く事が出來る。靈の交りは聲を出さないでもよい、

お話もなくお願ひもなく、只父母の傍らに寄つて居る事が、非常に愉快な樂しい事に覺える事もあらう私の子供の時、椽側に蓆を延いて月下に父母と睦び遊び疲れてうたゝねした事は今も尙忘るゝ事が出來ぬ樂しさである。天の父に接觸し、神の人格に感化され、清く高くなり、神の御輝きが現はれたならばいかに樂しい事であらう。然らば祈禱は靈の交りに止るかといふにさう斗りではない。我れ我れ人間の生涯は生死の大問題に幾度も遭遇し、是非共天の父の助けを乞はなければならぬ事がある。已れを忘れて神に突貫して、是非是非と乞ひ、眞實赤心から溢るゝ願ひは、確かに聞かれる。私の子供が四つの時であつた、大病にかゝつてもはや醫者も見離した。その時私は祈禱會に出席して、傍らに人の居るのも忘れて「かの兒を生かしめ給へ」と祈つた。その時「確かにかの兒は死なず」との自覺に入つたが、不思議にもその翌朝より病兒の食慾がつき一日一日と剝ぐが如く病は輕くなり、幾何もなく全快した。然してこの兒は二十二歲迄健全であつたが其の歲また病に犯されて遂に世を去つた。その時私は彼れは四つの時死すべかりしを、神は余が切なる願ひによりて十八年彼れの命を延ばしめ給ふた。今彼れを取り去り給ひしは、必ず自分を敎育する爲めであらう。神與へ神取り給ふ、エホバの名は讃むべき哉と祈つた。自分は祈りの餘りに聞かれる事を恐れて、一生懸命の祈りは多くは出來ない。もし神に祈つても聞き給はず、空を打つに等しかつたならば、誰れが祈らうぞ。今日世界の多くの人が祈りするのは、祈りに答へあるを自覺するからである。

△祈禱の生涯

使徒ポーロは羅馬書十二章に「祈禱を恒にし」と云へり。その意は絕えず祈るべしと云ふにある。急しい生涯の人がどうして祈禱に左樣に多くの時間を取る事が出來やうかと云ふであらう。それは祈禱を知らぬ人の事で、祈禱の生涯は天の父の懷に入れる生涯天の父の心を心とする生涯である。神の歩む道は高く人間は遙かに低く歩んで居るが、祈禱の生涯はその人間が神の道に引上げられて行く生涯である。人間は稍ともすると軌道を逸し易い朝聖書を讀む時また「清く正しき心を以て世の爲め人の爲め、盡さしめ給へ」と祈る時、或は「神よ願はくば誠の愛を以て人に仕ふる事を許させ給へ」と祈る時は、神の

線路を歩んで居るので、その祈りが續く生涯は超越の生涯、煩悶、心配の生涯を離れ、神と同じ道を歩む事が出來る。然るに神の事を思はず、己れの事斗り思ふ故に俗惡に陥るので、ポーロが「富に居るの道を知り、貧困に居るの道を知り」と云へるが如く凡ての境遇に支配せられず、超越の生涯に入る事が出來る。祈禱の生涯は世俗の何物にも捉はれざる生涯である。どうせ人間が何かに捉はるゝ運命を持てるならば、願はくば神の大御心に捉はれたいものである。神の線路を歩む祈禱の生涯は最も喜びに滿ち充ちたるものである。ポーロは「喜べ我また言ふ喜ぶべし」と云つた。ほんとうに天の父に凡てを任し奉り、その御保護に信賴したならば、私共は何の心配もない。自分の心配する領分とお父樣の心配する領分とは、其の領分が違ふ。講演をすることにしても出來る丈けよく準備して置く事は人間の領分であるが、それが人に如何に聞かれ、如何に用ひらるゝかは神樣の思召如何である。忠告するにも聞くと聞かざるとはわれの預り知らざる所、病人の病ひに就ても人力のあらん限りを盡して、其の餘は神のみ知り給ふ所である。我れは神の領分迄を犯す事は出來ない。神の聖旨をなさせ給へとお任せする生涯は實に安心なものである眞に「天つ世の心地して」送れる生涯である。キリストの御生涯はもとより、フランシスや、クララの生涯もそれである。古來の聖者は皆その愉快な生涯を渡つた人々である。ブース大將は八十餘であるが近來失明して盲目となつた。あの活動的な大將が失明しては不自由を覺ゆる事は人一倍であらうが、然し先日も山室君と話した事であるが、其處には更らに大なる神の思召がある事と思はれる、大將をして更らに奥深い祈禱の生涯を送らしめんとの神の攝理で、大將にとつては非常な賜物と云はねばならぬ。世に屬ける何物を失ふとも祈禱の生涯に入る喜びは、優にそれを償ふて餘りあるを覺ゆる。祈禱の少い日本に於て、我れ我れは大にしては國家人類の爲め、小にしては家庭の爲め更に小にしては一身の進歩發達の爲め共に祈禱の生涯に入らんことを希ひ度いものである。

（完）

夏期修養會記事

▲二十三日（火曜日）

開會に先つ三日、俄然我れ等は　聖上陛下の御大患を拜聞し、恐懼措く所を知らず、只管その御平癒を祈りつゝ、廿三日東京を後にして兼ねて會場と定められたる神奈川縣横須賀大津村なる勝男館に向ふ。南は山口、北は北海道より、次々來會せられ、玄關にて渡さるゝ名詞に、校名、姓名を記して胸に付け、再會を喜ぶ者、初對面の挨拶を取かはすものとり／＼なれど、時節柄いと靜肅に見受けらる。

△開會式　午後七時小此木松子氏司會の下に、河井道子氏の挨拶あり。今會期は親睦會、遠足等凡て御遠慮申上げ、萬事靜肅に、只管先づ神の國と其義とを求めよとの標語を心にしめて、修養を専らんにせんことを望むと語らる。等しく　陛下の御大患を憂ふる念は熱誠なる祈りとなりて表はる。

來會者非常に多かりし爲め、勝男館狹隘を告げ近傍の寺及び百姓家に數十人監督者に伴はれて分宿する事となる。氣温狂ひ、初秋の如く風冷たく、濤聲高し。

▲二十四日（水曜日）

△早天祈禱會　五時三十分といふに、四方海に面したる五十疊の二階會場に於て、靜かに天父に咫尺す誰れか祈禱の樂しみを覺えざらんや。

△聖書の組　八時半より九時半迄日曜を除くの外毎朝、未信者の爲め基督教々理の初歩につき山田千代子女史、福音書に就て今井壽道氏、舊約歷史に於ける三大轉機に就て都留仙次氏、基督の神の國に就ての教へ（英語）ミス、マクドナルドの四組にして各々希望の組々に分つ。

△講演　十時より十一時迄「基督の教訓と婦人問題につき、別項記載の通り廣岡淺子女史の講演ありたり。

同　午後

△懇話會　二宮貞子史司會の下に三時より開會、先づ委員、役員の紹介につぎ、會員一同の紹介を了したる後、委員、役員數名の五分間談話あり、餘り笑はせても、餘り鹿爪らしくてもいけぬといふ相談なりしとて、大分苦心の跡を見る。

△青年會協議　七時より八時に亘り、三谷民子女史

の司會にて、「日本に於ける基督教の事業」てふ事につき、協議を開く、先づ默禱、讃美の後、特に　聖上陛下の爲めに祈り、唱歌隊の歌を以て始む。シルバーベーの夏期修養會に參集の日本婦人方の送辭、以弗以書六章二十四節「願くは我儕の主イエス、キリストを變らずして愛する凡の者に恩あらんことを」を朗讀、本會よりも稻毛なる富士見町敎會の家族修養會及び京都　志社開催中の男子青年會の夏期修養會に向つて挨拶の電報を打つ事に決し、司會者の報告に移る。「本年三月の調査によるに我が日本に於て僧侶五萬一千二百六十八人、神官一萬四千八百三十六人に對し、基敎牧師は僅に五百六十三人に過ぎず。未だその勢力に於て非常に劣つてる。然し現今孤兒院、病院、遺癈園等クリストの名によりて建てられて居る慈善事業は多く、既に種子は蒔かれて居るのである。然しながら十戒の中にも主よ主よといふものは罪せらるゝとある如く、主の名によつて營むと標榜するよりも、主の精神を體して行ふ事が大切である。米國に居つた時ボルテモーのジョンスホプキンスといふ病院を訪れた時、門内の石に「凡て疲れたるもの、重きを負へるものは我れに來れ」と記してあつたので、問はずしてその病院の精神を知る事が出來た。又私は先頃米國の一友から美しい手紙を請取つた。その友人は非常の秀才であつたが、大學卒業後黑人の傳道に身を捧げて、その孤兒を世話して居つた。然るに或日生れて一ケ年にもならぬ腫物だらけの黑人の孤兒を預けられた。いかに愛さうと思つても、愛されない樣な子供であつたが、膝に乘せて機嫌をとつてやらうと思ふと、疳をたてゝ泣く、いかにも始末に困つた。或る春の始め、この子供を抱いて、外椽に出て椅子に腰掛けて居ると、心地よい微風が花の香りを送り、知らず〳〵うとうとと始めた。忽ち子供と自分と位置をかへた夢を見た、そして腫物だらけの黑人の兒になつた心地になつて居る、と立派な貴人があらはれて、もし永久にその位置を代えたらどうであるかと云はれた時、自分は心から非常につらく覺えたと思ふと目さめて、子供に心から詫びて抱きしめると涙がほろ〳〵とこぼれて子供の頰にかゝつた。すると子供は目をさましいつにも似ず可愛しい手を自分の頸にかけて、にこつと微笑んだ。其時から私と子供とは離す事の出來ない愛情が出來たと、實にキリストの精神が宿つ

た時、無心の子供にもかくの如く通ずるのである。クリスト教の事業と云はなくとも、その精神があれば、必ず人を動かす事が出來る。願はくば日本の基督教事業が、益々その精神に於て培はれん事を望んで止まぬ」と、いふのであつた。次に、英人ミス、バラードは二十一年前日本に來り、傳道に從事して居る有樣を語り、確かに今日は信者の數も殖え、世間一般に賛成者も殖えて參つたが、然し當時の日本は餘りに多忙にして、靈を養ふ暇が乏しい處から、基督者が、基督教生活から稍ともすると離れて終うに至るを慨すと語られた。讃美、主の祈りを以て閉會。

▲二十五日(木曜日)午前

△聖書研究　前日と同じ

△講演　十時より十一時迄今井革氏の「祖先と宗教」に就て講演あり。別頁記載

同　午後

△講演　午後三時より今井革氏「祖先と宗教その二」につき講演あり。別頁記載

△夕陽會　六時十五分より同四十五分迄、青山女學院某姉の司會にて、海に面せる後庭に集ひ、讃美、祈禱す。夕陽淡紅に空をそめ、海上の波も靜かなり聲をあげて祈る者、默すれど心に祈る者、自ら靈性の清めらるゝを覺ゆ。

△求道者懇話會　山田千代子女史の司會にて、求道者の爲め特に懇話會を催す。ワトネ女史の獨唱につき、廣岡淺子女史の經驗談あり。茶菓の饗應の間に懇談して、益々基教の精神を知るの便を與へらる。

▲二十六日(金曜日)午前

△早天祈禱會　捜眞女學校某姉の司會にて、五時半より例の會場に集り、海上を渡る朝の空氣を心ゆく儘に浴びて、讃美、祈禱す。

△聖書研究　常の如し

△講演　十時より十一時迄今井壽道氏の「信賴の生活」につき講演ありたり。別頁記載

同　午後

△親睦會　二時より親睦會を開く豫定なりしも、之れを廢して、自由の時間とし、各自讀書、談語に送る。

△青年會協議　七時よりワトネ女史司會のもとに朝鮮、支那、印度に就ての協議に移る。來會の支那人陳、李兩女史及び朝鮮人金澤とし子姉の談あり。

その大要は左の如し。

陳女史曰はく、基督の道は、支那に於て漸時發展しつゝあり。諸宗教學校に於て、年若き男女學生は熱心に其の道を辿るのみならず、日常百般の行爲に現はれ居る基督教の高德に感じて、此の道に入る男女多し。又現に日本に在留する支那女學生間にも漸時此の教へを信ずるものを生じ、中には父母の烈しき反對を漸時にしづめ、遂に其の賛成を得て、公然信仰に入りたるものあり、向後支那を善導し、開發するものは、獨り基督教あるのみなる事を確信す。

李女史曰はく、米國女子青年會が、東洋よりの女子留學生に對しての扶助甚だ多し。未知の他國に上陸して、大なる危險、誘惑を眼前にする其の時より初めて、學校、學課の撰擇、長き休暇の處置、其の他細大の事に關して、友となり、師となりて、吾々他國人を擁護せらるゝは、青年會幹事諸氏なり。已に過日もシルヴアーベーなる夏期修養會に、吾々數十の東洋人は招待せられて、最も有益なる十日間を過したりしが、其の會期中に於て最も痛切に感じたるは、實に基督の愛の教義の前には、國の差別、人種の懸隔等は全く無視せらるゝ事なり。同所に於て吾等は幾百を以て數ふる彼の地の女學生に對して、眞の姉妹の如く感じたるが、現に今此の地の修養會に臨み、再び同樣の感に打たるゝを覺えたり。殊に貴國と吾等とは歷史に於て、習慣に於て、甚だ酷似せる所あるを以て、其の相近きことも亦一層なりと思ふ。今後相共に進步發展して、過去に於て歐米が我れ我れに稗益する所ありたるが如く、近き將來に於ては、我れ我れ東洋人も亦世界に貢獻する所あらむを期す。

金澤とし子姉曰はく、自分は故國朝鮮に在りて、日本人の教師の下に小學校を了へたり。其の當時一向に希ひたりし唯一事は、進んで學を修めて、世に著るしき者とならんとの思ひなりき。此の心抑え難く切なりしかば、父母に乞ひ、師に計りて遂に日本に留學するに到れり。爾來日本女子大學附屬にありて業に就けるが、其の間或は師より、或は書より得たる感化の大要は、單に事物を知りて大業を樹つるのみにては、人間の能事了れりとせず、須く人は其の品性を高くして、人格の修養に力む可きものなる事なり。此の事を知りて以來、餘暇ある毎に、修養の書を渉るを樂しみとして、日夜心に鞭てり。現に

此の修養會の如きにあることは、此の意味に於て非常なる効果あるものなることを信ず。尙此の後とも諸姉妹方の敎導により、益々心を磨き、高きに進まむ事を期す。

▲二十七日(土曜日)午前

△聖書研究　同前

△講演　長尾半平氏の「先づ神の國と其義とを求めよ」といふ講演あり。別頁揭載

同　午後

△遠足　前述の如く遠足を廢して、自由の時間とし未信者の爲めに、特に會を設けて懇談せり。

△靑年會協議　支部代表者よりの報告あり。卽ち每號本誌「會の消息」にその槪略を揭載しつゝあれば此處には省略す。

▲二十八日(日曜日)午前

△讃美禮拜　九時半より十時迄

△說敎　別項記載の「基督の婢」につき、元田作之進氏の說敎ありたり

同　午後

△講演　三時半より宮川經輝氏の講演ありたり。別頁記載の如し

△讃美禮拜　六時十五分より同四十五分迄

△靑年會協議　河井道子女史司會の下に、日本に於ける靑年會の將來に就て語らる。今日我が靑年會の爲すべき事業は非常に多く旣に着手し始めたる看護婦間の傳道、工女の傳道等も益々擴張し、家を離れて下宿住居をせる女學生の爲めに慰安を與ふるに足る休憩所の如き設け、職業案內所等枚擧に暇あずとて、大に將來の抱負を述べて、一同の奮起を促す

▲二十九日(月曜日)午前

△早天祈禱會　五時半より例の如く讃美、祈禱して連日此の會の上に加はりし恩惠を謝し、且つ我れ等の靈性を愈々磨かんことを祈る。

△講演　十時より宮川經輝氏の「靈的修養その二」に就て講ぜらる。別頁記載の如し。

同　午後

△靑年會協議　土曜夕に續ける各支部の報告あり。尙小橋三四子「明治の女子」に就きての報告、幷に希望を述ぶ。

▲三十日(火曜日)午前

△奉悼式　今朝未明　聖上陛下遂に崩御ましましぬとの悲報に接す。一同爲す所を知らず、溢れ出づる

涙を抑えつゝ、會場に參集、折柄今朝講演の豫定なりし山室軍平氏司會の下に、遙に奉悼の意を表して心より祈る。山室氏の「攝理」てふ講話は時に適ひて聞かる。次號掲載

△解散　同夕送別會ありて、翌朝解散の筈なりしも奉悼の意を表して、直ちに解散する事となり、一同涙の中にも深く攝理を信じて、萬事を主に任し奉り旅裝を整へて、東西に別れ、夕迄には既に十數人の殘るあるのみなりき。世はこの日より明治に別れて大正に入る。思ひなきを得んや。

△會員數　來會者總數、二百二十八名、二十六校、支那人六名、朝鮮人一名の來會あり、內未信者三十餘人なり。(小橋三四子記)

參會者所感

○　森田松榮子

朝

あたらしき朝はまたきぬあたらしき讃歌うたひ
ていざむかへまし

海窓早禱

默禱の窓をひらけばおほわだのさ霧うすれて日
はいまのぼる

夕陽會のある折

讃歌をばのせてひろごる波の輪のはてなきはて
をながめぬるかな

おなじく

こゑあはせこゝろあはせてさかえあるみ歌あげ
ませたかき聖座に

海邊雜詠

なみとあそび波とたたかふおさなごのうき世の
うみにいてん日思ふ

おなじく

かつを船いまかいづらし朝霧のうちよりひゞく
かこの船うた

同

あめつちのとはの沈默につつまれて月なき磯に
きみとわれと立つ

三十日悲しき號外のしらせに

あめつちのくつがへるらむこゝちしてこのひと
時はわれにもあらず

かなしさやるかたなくて
ひたぶるになみだながれてたゞかなしみすくひ
の手はありとしれれど
　この日
ぬかづきて祈るとすれどひたぶるになみだなが
れて身はわななきて
『主イエス、キリストはわがのぞみ』
ふし沈むうれひのうちにおぼれなむ君をのぞみ
とあふがざりせば

○

内田文子

大津に於ける修養會に連り、日毎美はしき景色を眺め、又名士の意味深きお話を數多承り、種々なる教訓を得、折々思ひ出しては喜びと感謝とに滿たされて居ります。その内で最も嬉しく存じましたのは人に接するを得、それによりて教へられた事で御座います。こゝに所感の二三を擧げますれば、

第一に委員其の他の方々に接して、大層驚きました。それは大抵の方が想像して居りましたよりもお若く、年老いて居られても、若々しく元氣に滿ちて居られました事です。いつも自分の事計り考へず、神の御榮えの爲め、人の爲めに何かせんものと、己れを忘れ、常に此の世のつまらぬものに心をかけず高きものに目をとめつゝ活動して居られるので、內なるものが日々に新たになり、凡ての事に勝ち得て餘りある生涯は、自づと外にあらはれるのでせう。世の己のが事計りに氣を取られて、いつも不平と不愉快に滿ち、精神の死して居る人々と、其の樣子の全く異つて居る事は申すまでもありません。成功すると否とは神に委ね、一向御國の爲め勞を惜まず働く事は、大切な事と存じます。

第二に感心いたしましたのは、皆樣の人知れざるよき行ひで御座います。かくれたるに見給ふ汝の父は、あらはに報い給ふべしとの御言葉の眞なるを思ひました。自分のよき行ひが、成る可く人に見えざらん事を望んで居られるのですが、その影響は四方に及んで居ります。

外國の婦人方には一しほ感じました。疊の上に長く座する事を忍び、一週間もなれぬ食物を喜んで食せられ、其の他海水浴、入浴の場にも、只人に喜びと樂しみを與へんとして、自分を全く忘れて居られる樣は、實に美しいと思ひました。無意識の內に善

き行ひをして居る計り美はしき事はありますまい。あの方々はそのよき行ひによりて、人々をして彼等にあらず、天にいます父を崇めしめん事をつとめて居らるゝのであります。

第三に數多の方々に接し、基督信徒の交りの如何にも美しい事を思ひました。神戸女學院からはたゞ一人なり、知らぬ方計りの中に始めては入つて、さぞ淋しい事だらうと私かに案じて居ました。處がいつの間にか同室になりし方々を始め、諸所の學校より來られし皆樣と、恰も幼き時よりの友の樣に中垣なくお交り致す事が出來、まあ、何と打ちとけたまとゐであるかと驚きました。これは一つは集つたものが神の國と其義とを求めんとの一つの目的を持つて居た事と、他は主の宣ひし「我が爾曹を愛する如く、爾曹互に相愛せよ」とのお言葉を實行せんと務めて居る神の子等の集ひであつたからではないかと存じます。夕日の西に落つる頃、あるは月の夜などに、これまで物語りし事もなき方と手をとり、心をきなく語りあひつゝ海邊をそゞろあるきし、數日前迄は見し事もなかりし友と、一つの蚊帳の中に臥し其の日受けし惠みを語りあひ、海邊より吹きくる風の涼しくて心地よきを喜びつゝ、寢につきし樂しさは、いつまでも忘れ得ぬうれしき記憶となつて居ります。

修養會にて三谷先生のお話の內に、米國のジョンス、ハツプキンス、ハスピタルといふ病院の入口にキリストの像ありて、其の下に「凡て勞れたる者、重きを負へる者は我れに來れ」の句が書いてあり、云はずして基督敎主義の病院なる事を示して居つた。我が國にても、基督敎といふ名のつかぬ內にも基督敎的働きをしたきものだと申されました。思ふに今は我が國の信者、特に基督を愛する婦人の爲すべき事は、いろ〳〵と基督の敎へにつき口にて議論し或は說明するよりも、心の內に眞に聖きものをやどし、日每の行ひが何となく氣高くなつて、知らず識らずの內に人を感動せしめ、或は感化するのが、何より大切であると存じます。それは一と通りでは出來ません。朝夕の熱き祈り、人知れぬ神との交りにより、又は聖書によりて敎へられ、止み間なく進まんと務めなければ、日々に高まつて行く事は出來ません。修養會につらなり、之れ等の事を深く感じ、得たる賜を思ひ、愈々勵みて御榮えの爲め、幾分な

りとも盡したいものと存じて居ります。

○

大谷ひさ子

私は昨年の修養會に參りましてから、今年も是非參り度いと存じて居りまして、お誘ひを受けましたので、早速家の者に相談致しますと、仲々免して呉れませんでした。それで先生に其の由申し上げますと、御親切に神様にお祈りしたならば、神様は必ずよき様にして下さると仰せられましたので、私は失望いたさずに、明け暮れの祈りの中に、必ず此の事を含ませて居りました。然るに先生の仰せられました通りに、神様の御恵みによりまして、願ひは聽かれ、一週間を修養の爲めに用ふる事ができる様になりました。其の時私は今更ながら祈に答へ給ふ神の恵みの無限なる事を深謝致しました。

それで私は先生方やお友達と列車を同じくして、喜び勇んで會場なる横須賀へ參つて見ますと、其の靜かで眺めの宜しう御座います事、前は平和の波をたゝへたる廣濶な海、後は清秀の氣に充ちたる重疊の山で、自然の偉大を心ゆく計り味ふ事ができました。殊に人生の亢奮をしづむる夜に近い夕方の景色は何とも云へず爽快に感じます。このやうな美はしい自然に接した場所で、修養會の開かれましたのは最も適當な事と存じまして、皆様のお骨折りを感謝いたしました。

そして朝に夕に講師の方々からは貴いお話を承りますし、姉妹方からは御親切に教へて頂きますし、私の様な神様の道のやつと解りかけました者の心には、一層の力と慰めとを得ました。よるべない人生は常に不安で、滿足して居られなかつた事が屢々ございました。其の上悲しい事には不安を除く方法を知りませんでしたのでございます。けれども度々お話を伺ひ、また皆様の生きたお手本を見るにつけまして、其の方法が解つてまゐりました。

「天地のつきざる中は法律の一點一畫も遂げ盡さずして癈る事なし」と云はれた。この不易な貴い神の法律を知る事のできました此の身は、ほんとに幸でございます。

腓立比書の第四章に「何事をも思ひ煩ふ勿れ、唯毎事に祈禱をし、懇求をし、且つ感謝して己のが求むる所を神に告よ、神より出でゝ人の凡て思ふ所に過ぐる平安は、爾曹の心と意をキリスト、イエスに

因て守らん」といふ事を見ましたが、人の滿足は信仰により活ける神の救と守りとを受けて潔く正しく新らしい身となりましたならば得る事が出來ます、これこそ實に萬物に優れる絶大絶好の賜といふ事を切に感じました。これも皆此の會のおかげでございます。

元來私の此會に出たいと切望いたしましたのは、修養の目的を遂たかつたのは勿論で御座いますが、此の外に此の會に諸所の異る方面からお集ひになります諸姉方と親しくお交りしたいといふ事も目的の一でございましたが、講師諸氏の御熱心なるお話をきゝ、役員諸氏の御親切なる御周旋により、私は此の目的を遂げる事ができまして、誠に感謝に堪へません、唯々千載の恨と存じますのは、御不豫にいらせられし　先帝陛下が私共一致して其の御平癒を祈つた甲斐もなく、悲しくも集會の終りの日に崩御の報に接した事で御座います。それ故私共は匆卒行李を理めて歸京致しましたが、汽車中でも何となく物靜かで、語るはたゞ先帝の御聖德を稱へ奉るのみで御座いました。

此の集會の一週間は短時日で御座いましたが、私共の受けた賜は實に大なるもので御座いました。我が女子青年會の事業の盛んになる事は、即ち日本女子の德性の涵養せらるゝことであると思ひますので、其の事業の一たる修養會も年々盛大に赴くやうにと祈られます。

○

安中花子

ガラ／＼ガラット威勢よく車が勝男館の玄關に止まつて、今や開會の目も廻らむばかりの忙しさの中に、物馴れぬ小い身を入れた瞬間、さすがに不安と面はゆさにをのゝきました、と申せば餘りに他人がましい言分かも知れませぬが、何にしても初めての出席者の感想としてお聞き下さらば、强ちお怒りの種ともなりますまゐ。

籠に育つた鳥の身には、籠は天地で御座いました。廣い大空とは名のみに聞けど、我れ弱鳥の小き翅をかしこに練らし來むの望みも湧かず、修養とは遙けき方の人々の、炎暑にもめげでの甲斐／＼しいお働きよとばかりに、對岸の火事にはあらぬ、對岸の花園、さしあたり橋も見えねば、渡り行かうともせで、空しく過し果てた幾夏が、今更ながら惜しまるゝま

で、此度初めての出席に依り私は深い〳〵教訓を受けました。

小い胸に不安覺えしも束の間、委員、諸先生や、友方の優しき御心盡しに、淋しい思ひは消え果てゝ、大津に暮した一週間は、家族揃うて引越しをして行つた朝のやう、場所こそ變れ、溫い心地で起き臥しいたしました。

我れを圍む溫い氣分、これが何よりも先に私の胸に染み入りました。宮川牧師の講演の一節にも傳道の秘訣は愛であると座いましたが、私はこの修養會で人の誠を味つて參りました。同時に我れ等若き娘の前途には、誠ある指導者――同じ婦人の指導者――有るを思ひ、云ひ知れぬ心強さを覺えました。

所謂新らしい婦人とは、今日此頃厭きる程耳にする言葉で御座いますが、頭に白髮をいたゞき身にいかめしき智識を貯へながら、なほ謙遜に飽くまでも深く、廣く受け入れる、かゝる人をこそ眞の意味に於ける新らしい婦人と申すので御座いませう。修養會上かゝる君方を多く目にして參りました。

今も耳に殘る聖書の組での師の君の御一言「此の肉體の衷に潜める靈魂、それが「我」なる者で、肉體は唯この「我」の住居、人種の別、國の別、是等は家屋建築の差で、衷に住む人は總て等しい」と。初めて出席した私はまだ〳〵何も解せぬ幼兒然し此の御言葉を青年會活動の key-note と聞きましたは誤りか、兎も角も私には斯く思はれました。

垂乳根の母に返りしさすらひの
子の如泣きて我が身思ひぬ

樂しきまどゐに涙とは受取れぬ話なれど、喜びと悲しみとは、涙に於て一致するものやら、神を思ひ自然をさぐり、我れを思うて、大津の濱邊の人影見えぬ夜の寂寥の裡に、嚴かなる人生の使命を、また新たに悟つた喜びは幾度か涙となつてあふれました。

和氣こもる百有餘名のまどゐの隔なき笑みと、獨り靜けく思ひ澄ませし夜の喜びの涙と、幾多著名の先生方の御敎へとは、共に私を「見えざる大能の御手」の招きます方へと伴いて、「意味有る生涯」を送れよとのさゝやきを我が胸にもたらしました。

小さき身の弱きを知ればよるも晝も
天のみかてに生きむとぞ思ふ。

○

朝鮮人　金澤とし子

今回の修養會に於て、私は修養計りでなく、休養も共に出來ました事を感謝いたして居ります。諸方の方々と御一緒に親しく暮す事も出來、又狹い心を磨き幾分か自分の缺點を見出す事も出來ました。只今でも頭に殘つて居りますのは誠に神聖な處で、每日修養のお話を伺つた事で御座います、私の一番注意致して伺ひ、また興味のあつた事は、偉い人の性質と態度に就きまして大變感じまして、其處へすぐ自身の小さい事を考へられまして、每朝默禱いたします時、不謙遜で、不眞面目であつたことを益々自覺いたしまして、赤心を以て神樣にどうぞ清い者になる事をお敎へ下さいませとお願ひ致しました。何時でも休みの時間さへあれば、これは休養の時であると自分で定めたりなどして、出來る丈け皆樣と一緒に愉快に遊び、自分の足らない處を注意して頂き度く望んで居りました。全體では出來ませんでしたが、一部分の友人とは大變に親しくなり、その感化を受けました。私は二三十分宛日々に必ず友人と打連れて海邊で波の音に注意を拂ふ事が出來ました。初めには中々出來ませんで、色々の考へが起つて他所見をしたり、船に乘つて居る人々の樣子を見たりして注意がまとまりませんで困つて居りました。或人が申しますのに、先生からも伺つた事ですが、あのやうに強い勇ましい波の音に、長い間集中の出來る人は、何事にも集中の出來る人であると申されましたから、この時大變に喜んで、一生懸命に勉めて居りました。每日海水を見渡す時に、只樂しく心地よい事ばかりでなく、少しも動かずに靜かな時と、誠に強い勇ましい波のうつ時に自分の性質はあのやうになりたう御座いますよと、一人で申しまして、色々と方法を考へて、ほんとうに靜力と動力の有る人間になる事を決心いたしました。

新刊紹介

△恩寵溢るゝの記　バンヤン作　松本雲舟氏譯

本書は天路歷程の著者として知られたるジョン、バンヤンの自叙傳である。もし讀書界に面白い書物と云つて尋れたら或は數少くはないかも知れぬが、我れ等の心情に高き調子を與へる書物に至つては誠に多からざるの恨みがある。本書は譯者自身始めは餘りにその調子の高きに困難を覺はたさあるやうに、人間の靈界の經路を寫して妙を得たものである。譯者はこの書が餘りに內的事實に偏して外界に起つた事實を粗略にせるを遺憾とし、親切なる傳記を附加してバンヤンの生涯を一層明らかに寫し出さんことに務めて居る。

發行所東京京橋區尾張町警醒社。定價壹圓也

隨感

閑談

風江

朝から雨が降つて鬱陶しい日であつた。何んだか壓しつけられるやうな心持がするので、氣の合つた友のところに出かけた。其の友は英文學に曉通し、大學に居る頃は Bookworm と云ふ仇名を取つて居た丈けあつて、社會に出てからも讀書の趣味は減じない。

押開いた書齋の椽近くに打寛いで午後を樂しく語つた。茅蜩が庭で盛んに鳴いて居る。雨は止んだやうだが、まだかつと日が照らないので、薄い霧に包まれたやうな氣持である。

『今日位新刊の書籍が夥しく讀書子の心をそゝることはないね。時々書肆の店先に立つて此んなに澤山の書や雜誌があるが、一體常に存在の價値を有して居るものは幾冊あるであらう。僕等が學生時代に愛讀したもので、今日までも殘つて居るのは極めて少ないぢやないか。此んなことを考へて寂しく思ふことがあるよ。君は英文學に精しいのだが、英文學のうちで何時までも存在の價値のあるものは何んなものであらうね』。

自分は問ふて見た。すると友は答へた。

『さうね書籍が存在するに二つの途があるよ。カライルがサルタア、レザアタスに面白く云つて居る。君の背後のケエスにあるから、一寸讀んで見てくれたまへ』、

自分は其れを取り出して讀みあげた。

『げに眞正なる善書の力は不思議なものだ。石造の古い市が年々少しづゝ碎けて、年々之が修繕を要するやうなものではない。寧ろ耕された畠のやうなものだ。靈的の畠だ。靈的の木のやうに年々歳々聳えて居る。年々其の葉が新しく茂る。それが皆な人を說服し得る魔力を有つて居る。……愚だ。旅客よ、何故君はギイザの石のピラミッドやサッハラの土塊を熱心に眺め、古代の遺物の研究に疲れて居るか。彼等は過去三千年間馬鹿げ切つた面をして、砂漠の中を眺めつゝ空しく立つて居る。然し君は斯の如くヘブルの聖書を開き得なかつたか。然らざるもルウテルの飜譯書にても開き得なかつたか』。例の調子で奇警な言をなして居る。友は云ふ。

『僕はルウテルの飜譯の代りに、英譯の聖書を讀めと云ひたい。それに沙翁と加へるかね。然らば君の疑問に答へ得るものを見出すであらう。僕は英語が文明國の人民に由りて使用されて居る間、英譯の聖書と沙翁の劇とは常に新しい興味を以て讀れると思ふね。英語を話して居る人民は今日でも其の生涯の成功は此の二書に負ふて居るのである。ヨルクの大監督シャアプは自ら此の二書に負ふところ多きを感謝して居るのみならず、年若い傳道者にも之を常に讀むことを勸めて居る。かの詩人テニソンも毎日聖書と沙翁とを一節づゝでも好いから必ず讀めと青年に忠告し、「其の一方からは君と神との關係を知り、他方からは君と他人との關係を知るであらう」と云つて居るよ』。

『君は二つの途と云つたが、書物が存在する他の途は何う云ふ風かね』。

『之を譬ふれば穀物のやうなものだね。年々古い種から新しい穀を結ぶではないか。思想も矢張此う云つたやうなものさ。古い思想が種となり、之に新しい經驗や研究が加つては新しい思想が出て來る。新しい時代に適するやうに常に新陳代謝して行く。毎年新しい書籍が盛んに收穫せられるのは其の譯さ。見たまへ、十年前に喜んで讀まれたものが、今日顧みられもしないのは、年々收穫する穀物は其の時々に消費され、古いものは年を經ると共に役に立たなくなると一般さ。新刊ものゝ盛んに出來るだけ國の生命が充實して居るとも云へるであらう。』

『面白い考へだ。然し英文學のうちには萬世に傳るべき傑作が外にもありさうに思はれるが何うであらう。例へばミルトンの「失樂園」とか、バンヤンの「天路歷程」とか云ふものは何うであらう。』

『さう此等も傑作には違ひないが、其の宗教的若くは人情的の興味と云ふものはとても聖書や沙翁の宇宙なるには及ばないね。然し「失樂園」にせよ、「天路歷程」にせよ、確かに人生の大問題を捉へて居る近頃も松本雲舟君がバンヤンの「恩寵溢るゝの記」を譯したが、其の書にせよ、「天路歷程」にせよ、「聖戰」にせよ、自然と心靈との戰ひを描いたもので、此の戰ひは人生の最も現實なる問題ぢやないか。「失樂園」も亦害惡問題を取扱つたものであるが、人間は此の神秘的な重荷を負ふて嘆いて居る。思慮のあるものは何うしても片付けねばならぬ大問題である。』

『實際是れはスフヒンクスの恐るべき謎だね。バンヤンなどのやうに戰つて戰つて戰ひぬくか、然らざれば誰も十分な解決を與へることの出來ぬ此問題を打ち棄て得るものは幸だ。約百紀も此の問題を取扱つた小說だが、大風の中から限りある人間は到底全能者の意思を知り盡すことは出來ないとの聲があつたと云ふので結んである。傳道の書の著者は中々の哲人で、また中々の苦勞人である。浪漫主義なこともやれば、自然主義なこともやつて見た。然し事の歸着するところは神を恐れて其の誡を守ることが人の本分だと呼んで居る。パウロの如きは絕對的の確信を以て物質と心靈、善と惡と云ふやうな關係は、何時か必ず滿足な解決を與へると云つて居る。唯物的な今の世の中ではバンヤンやミルトンが痛切に感じたやうな問題は一種の惡夢を見て居ると思ふであらう。

また實際今日はスフヒンクスの此の謎に對して滿足な解決が與へられないであらう。然し其れかと云つて其の謎は夢だと考へるのは、人生の半面の事實を見ないものと云はねばならないね。」

『其の通りだ。テニソンなども「追憶」とか、「洪大」とか、「クラレンス公」とかに、此の問題を歌つて居る。彼は明かに今後必ず此等の問題の解決せられる時があると信じて居る。愛するものゝ死は、また此等の問題が他日答へられるとの約束に關連して居ると云ふのは面白い。彼は死に對して「其の更に適當な名は前進である」と云つて居る。「洪大」の結句に

「我は彼を愛した、また限りなく愛する、
死は死でなく生くるのである。」

と歌つて居る。世の中の總ての矛盾は影である。生命の太陽に照らして見れば其の矛盾の影の奥に現實なものゝあることが解る。活ける神は完全な愛を以て此の世を支配して居られる。それで此の影の世界から光明の世界に入るときは、我々が今日解するに苦しむ秘密も、負ひ惱んで居る重荷も、其の意味が明かになるに違ひないと思ふね。僕もテニソンの考に同意せざるを得ない。』

『彼は自ら歌つた如く河を越えて、此の眞理を探見する航路に上つた。熟練な水先案内者は彼を安全に導いて、其の往くべき港に到着せしめらるであらう

『其れは疑ひを容れぬ。譬喩は確證でないが、人生を航海に比したことは古へから西にも東にもある思

想だ。回教の經典にも「ノアを水先案内者とするものは、海の波浪を恐るゝを要せず」とあるね。世の中には多くの未解決な問題があるが、解決が難しいからとて之を否定して了うのは甚だ宜しくない。熟練な水先案内者……僕等は之を主耶蘇に求める外はない……之に信賴し、忍耐して光明の港に到着するの日を待つの外はない。』

話題は其れから其れと限りなく移る。茅蜩の聲は一しほ勢を増した西の空には夕陽の雄大なる光榮が夏の雲を漏れて居る。

ブース大將逝く

宗教界の偉人、貧民傳道界の最大恩人たるウキリアム、ブース大將は八月廿日英京倫敦に於て八十四歳の高齢を以て永眠せる旨の悲報に接したり。大將は人も知る如く救世軍の創設者として、人間の靈肉併せて救ふを以て神意とし、從つて基督の精神の下に事務的に其の事業を運び、現社會に於て最も進歩せる組織を有せる軍隊に則り、今より四十七年前救世軍を組織せられたり。然れども大將の貧民傳道は遠く其の以前に行はれ、齢十五歳にして基督の僕となりたる時より、晝は工場に行き、夜は貧民傳道を務めたりといふ。

大將の生涯は神の僕として奮闘せりといふ一事を以て覆ふべし。今より數ヶ月前我れ等は大將の失明せられたる由を聞き、活動的の大將にして、その境遇に處するは一倍の困難なるを思へりしが、これ或は、更らに深く祈禱の生活を樂しむを得させんの神の攝理なるべきかを思ひて、只管大將の祝福を祈りしが、劇甚の活動より絕對の安靜に入りし生活の劇變は、遂に死期をかく速かに誘ふに至りしといふ。

大將の夫人が世にも稀なる賢婦人なりしは、世の普く知る所なり。先年大將の我が國來朝に際しても至る所の講演に、必ず「我が美しき妻」の言葉を發せられざるはなかりしを見ても、如何に內助の効の多かりしかを語りて餘りあり。大將が生前轉地療養せるハッドレー、ウッドは。最愛の夫人が久しく病を養ひたる紀念の地なりしといふ。今や救世軍の父母共に此の世に莫し。然れども彼れ等の靈は永遠に其の働きの上に幸せん

記者

哥林多後書の研究

柏井園

緒言

新約聖書を研究するものは、四福音書及び羅馬書の如き重要なる巻を研究するばかりでなく、其の他の部分にも渉らねばならぬ。ことに余は此の頃コリント後書に深き興味を感ずるものである。コリント前書と云ふ手紙があるに後書ばかりを研究するは如何であるかと云ふ疑問があるかも知れぬが、この二の書翰は大體獨立したものであつて必ずしも前書から後書に移らねばならぬと云ふ譯のものでない。然らばコリント後書と云ふ手紙の重ずべき點は何處にあるかと云ふに、パウロと云ふ人の人格や性情が最も鮮かに現れて居ること、又人格性情を透して宗敎的の眞理が活きて來て居る所にある。隨つて自傳的の所が他の書翰より多いのである。ピリピ書も同じ特色を有して居るが、書かれた時の精神の有様は大分違ふ。ピリピ書は喜びと滿足に滿ちて肺肝を吐露したものであるが、コリント後書は戰の後の平和、涙の後の喜びに腹の奥を搖り動かされて心の丈を語つたものである。たとへばピリピ書は夕暮の空に懸れる新月を望むが如くコリント後書は雨後の月を眺める心地がする。この書翰につきて以下記さんとすることは之を三箇條に分つことが出來る。第一はこの書翰の目的及び性質、第二はこの書翰に現れて居る敎理、第三は宗敎的生活に關する敎訓である。

第一章　目的及び性質

コリントと云へば希臘の歴史を讀んだ人は皆知つて居る如く、希臘半島の中程を扼して居る地峽にある都府である。希臘時代のコリントは一度羅馬人の破壊する所となつたが、かの有名なヂウリヤス、シイザー紀元前四十四年に之を再建した。本來の希臘人もあり、羅馬の殖民もあり、又東洋人も來り住むで世界的の都府となつた。東洋からエペソを經て羅馬に上る道筋に當つて居るので商賣の繁昌は云ふも更なり、文學藝術も亦盛であつた。しかし風俗は亂れて居つた。

パウロは第二回の傳道旅行の際この土地に道を傳へ一個年半以上留まつて盡力した結果ここに敎會が建てられた。年代は紀元五十年から五十三年までの中であると算する。之よりも三四年の後に置く學者もある。孰にしても基督が十字架に死なれてから二十五年とは立たない頃である。パウロはそれからコリントを去り一度エルサレムに上つて後、復た第三旅行の程に上つた。この旅では海を隔ててコリントと對して居る小亞細亞の大都會エペソの傳道に最も多くの時を費した。エペソを去る期の近いた時コリント前書を書き送つた。程なくエペソを立つてマケドニヤを經それからコリントに入つたのであるが、マケドニヤから後書を書き贈つたのである。斯く前後書の間を隔つる年月は長くなかつたが、この長くない間にパウロとコリントの信者との間に事件が多かつた。コリント後書の書かれた事情を知るためには少し面倒でも一通りこの事件を話す必要がある。事件の順序は大體次の如くであらう。

〇コリント前書を贈る

△コリントに行きエペソに歸る

△コリント敎會に書を贈る（コリント中書）

〇エペソを去る

〇マケドニヤよりコリント後書を贈る

〇印のついてある事は正確な事實であつて△印のついて居るのはさうであつたであらうと推測せらるる事實である。推測の基礎は何處にあるかと云ふに、後書十三の一に『我れ今第三次旅に到らん』とあるさうすると第三旅行の際コリントに行つたのが第二回でなくして第三回となる。使徒行傳には書かれないが此の間に一度コリントに行つた事があつたと見える。又同じく二〇一に『我再び憂を以て汝等に到らじと自ら決めたり』とある。初めて傳道に行つた時憂を以て行く筈はないから、別に憂を抱てコリントに行つたことがあつたと推測せらるる。又二〇四に『われ大なる患難と心の哀痛あるによつて多くの涙を以て汝等に書き贈れり』とあるパウロがコリント敎會の爲に心配したことは前書にも多少は現れて居るが、決して涙を以て書いたと云ふべきものでないさうして見ると別に涙を以て書いた手紙があつたに相違ない。この中間の訪問と中間の書翰は如何なる必要から出て來たのであるか。

前書に映つて居る空模樣と後書に映つて居る空模

樣とは大分變つて居る。前書に於ては譬へば地平線上に數團の雲が浮んでは居るが、天氣がさして險惡になつて來さうな樣にも見へない。ところが後書を見ると、風荒れ雷鳴つた後天氣漸く靜りかかつた樣である。そも〳〵パウロが前書を書いた譯を云へばコリント教會から手紙が着いて實際問題についていち〳〵質問を受けた(前七〇一)。それからパウロが最初に洗禮を授けたコリントの信者ステパノと他の二人の信者がエペソに着た。コリントからの手紙はこの一行が托せられて來たかも知れぬ。とにかくパウロは久々で此等舊知の友に面會して詳にコリント教會の近狀を聞いて見るとさま〳〵心配すべきことがないでもない。希臘人に有り勝の弱點が教會の内にも溢れ、黨派を結んで爭ふことや、男女間の德操の亂れて居るものがあることや、或は婦人の風俗、結婚、偶像に捧げる肉の事などにつき惑することなどを知つた。ここに於てパウロは前書を認めて教へ且つ戒めた。使となつて此の手紙を持つて行つた人はパウロの弟子のテトスと云ふ青年であつたと云ふことはラチゼー等の説である。それは後に記す事と關係があるから記憶する必要がある。且つ之より先きパウロはテモテをコリントの方に送つてあつたからテトス及び書翰と先後してコリントに着した筈である(前十六〇十)。日を經てテモテもテトスもエペソに歸つて來た。樣子を聞いて見るとコリントの形勢案外に惡い。元來コリント教會の中にはパウロを好まぬ人達があつて、此はイエスの直弟子なるペテロに屬するものであるとか、或は又我々の基督教は直にキリストを宗とするものであるとか云ふ風に標榜して(前書一〇十二)、いづれにしてもパウロに反對する仲間であつたことは事實である。ところが思ひがけなく少しの間にその仲間の勢力が急にはびこつて來た。之をかくならしめたに就いては外から之を動した誘因もあるらしい。パウロと云ふ人は其の性格の上から云つても鋭い人であるから敵が出來易い人であつたらしい。其の上彼は直接イエスの教育を受け其の撰任を被つた三使徒の一人ではない。今日でも獨逸あたりでパウロの基督教は耶蘇の基督教でないと論ずる人もあるほどであれば、パウロの生時に於てそのやうに考へて居つた人の少くなかつたも亦已むを得ざる次第である。別して猶太の基督者のうちには、基督者たるものは猶太人と同じく舊約

の律法をも守らねばならぬと主張する所謂猶太的基督教を唱へてパウロに反對し、彼が傳道した跡に廻つては人心を惑し教會を毀した人があつた。ガラテヤ都會の如きも此の種の人から少なからぬ害を被つたが、コリントへも此の一派の人だちが來てパウロの事を惡しざまに批評し、我々こそ眞正の希伯來人である、キリストの正統を傳へた傳道者である（後書十一〇二十二、二十三）、パウロが自身に天幕を作つて道を傳へ信者を累はせないのは彼が狡猾な處であつて、人心を收攬する術である（後十二〇十六）と云ふやうな事と云ひふらし、コリントの信者も之に惑はされてパウロが果してキリストの眞理を傳へて居るものであるか確な證據を見せてもらひたいなどと云ひ出した（後十三〇三）。パウロに對する反對はこれ即ちコリント教會が狹隘な頑固な形式的な信仰に誤られんとする危機を示したものである。パウロには自已の心事を誤解せらるゝのみでなく、三年間心血を注いで造り立てた教會はあたら此の輩に蹂躪せられんとして居る。憂心忡忡たらざるを得ない。彼は行李匆々コリントさして急行した。

いつもなればトロアスまで陸路を取り、それからマケドニヤに渡つて希臘に行くが常であるけれども此の時は心せく旅ではあるし海路を撰んだかと察せらるゝ。コリントに着いて教會の人々に會つて見たところが案外模樣が惡い。交渉の衝に當つた人々はパウロと反對の立場に立つて居る人、彼の心事を解せぬ人であつて、折角の志彼等に貫徹せぬのみならず、力のない他の信者までも此の人々に壓せられパウロに對して甚だ失禮な待遇をした。パウロと云ふ人は手紙に見ると偉さうであるが會つて見ると風采は揚らぬ言語は野鄙である（後書十〇十）などゝ惡口するものもあつた。是に於てパウロは今や時利あらず長居をしても益のないことを觀て取りしかば、限なき恨を遺して一先コリントを去ることに決したエペソに歸り着いてから滿腔の憂を一通の書翰に寫して涙ながらに筆を執つた『我れ大なる患難と心の哀痛するにより多くの涙を以て彼等に書き贈れり、此は彼等をして憂へしめんとするにあらず我が彼等を愛することの深きを知らしめんためなり』（後書二〇四）とあるのは即ちそれである。この手紙を持つて行つた使者はテトスであつた。其の頃パウロは程なくエペソを去らうと豫定して居つた時であつたか

らテトスがエペソに歸るを待たず出立しトロアスあたりで出會ふ約束をしてテトスを立たせた。かくてパウロは日を經て後エペソを出立しトロアスに着してテトスに會はれると樂しんで待つたがテトスはなか〱歸つて來ない。パウロはコリント敎會の事が心に懸つてたまらぬ。トロアスでは傳道の門戶が開けたにかゝはらず落ち着いて居ることが出來なかつたから殘念ながらトロアスの人々に別を告げて歐羅巴に渡つた(後書二〇十三)。マケドニヤでは何のやうな樣子であつたかと云ふに『マケドニヤに至れるとき我等の肉少しも安きことなくさま〴〵の患難に逢ひ外には爭、內には懼れありき』(後書七〇五)と記してある。內にあつた懼とはコリント敎會の成行について懷いた苦心と云ふのであらうと解く人もある。斯かるうち一日千秋の思ひを以て待ちに待つたテトスは歸つて來た。さてコリント敎會の消息如何であつたか。

夏島近し

今回の修養會場に近く、同じく東京灣に臨み、八景を名に負へる金澤といふ所あり。此處の沖合十町に夏島とよぶ一小島浮べり。これぞ明治聖代の偉業たる憲法起草の紀念の地と稱せらる。

明治十四年故伊藤公は、勅命を奉じて歐洲に遊び諸國の憲法を硏究して、歸來、十七年の春より秋かけて此の夏島に籠り、草案を起稿せられたり。草案成りて之れを奉るや、陛下御親ら皇族方を始め、諸臣を召して愼重に審議を遂げさせ給ひ、數年を經て、遂に建國來歷代の治國の範を紹ぎ、しかも時勢の進運に叶へる憲法を制定し給ひ、廿二年二月十一日の紀元節を以て、之れを發布し給へり。今や明治の聖帝神去りまして、この偉業を追想し奉りて語るも悲しけれど、この萬古不磨の大典ありて、我が國の基礎永遠に搖ぎなく、立憲君主國の精華と仰がるゝぞ有難き。東京灣頭、夏島近き邊りに立ちて感慨殊に深し。(三四子)



あさがほ

久野恭子

絹は、小さい時から病身で、藥に計り親しんだ。七ッ八ッの頃から、十九の今迄、同じ年頃の子供ともろくに遊ばせられずに、家の內、それも、大方床の中に、暮したので有る。

寢て居る時は、毎時も能く、黒地に金泥で、舞扇に紅葉を散らした、小さい蒔繪の手箱を、枕元に置いて、細い手で蓋を取つては、千代紙を、出したり入れたりした。其箱は、絹の曾祖母さんが、殿樣の姫樣から拜領したとか云ふ、古い、曰く附きの物で有つた。

起きて居る時でも、絹は御醫者樣の命令で、外に出されなかつた。なれども、絹は小さい頭に、自分は斯うしたもの、斯うして行かなければ成らないものと思つて、大人しく、母親が仕事して居る傍で、人形を抱いたり、千代紙を剪つたりしたので有る。

極く小さい時から飮みなれたせいも有らう、絹は普通の子供の樣に、御藥の駄〻を、こねなかつた。口直しとも言はずに、大人しく服んだので、其度毎に、絹の母は「斯んな娘は、長生しない〱。」と言つたのを、絹は今だに覺えて居る。

面長で、少し淋味の有る顏立の、靜かな娘だ。誰でも、絹に接した人は、一番先に、靜かな娘だと思ふさうで有る。絹自身も、靜かな所が好きで、騒がしいお客樣でも來ると、逆上せて眼がグラ〱すると言つて、逢ふのを、厭がる。

此頃、絹は、御醫者樣が勸めるので、親類から、種々の草花の種を貰つて來て、其世話をして居るので有る。四月も前に、種を下ろして、垣根の樣な物に這はした朝顏は、毎朝々々、紺や、紅や、絞りに美しく咲いては、蚊帳を脱けて來た絹に、「マア」つ

て言はせる。絹は、朝顔が咲く樣に成つてから、毎日、夕方に成ると、水を遣つては、明日咲く蕾を數へる。探して數へ乍ら、
「お母さん。」つて、母親を呼ぶ、母親が、
「何んだい。」つて、縁側に出て來ると、嬉しさうに見上げて、につこりして、
「明日は、是と是が咲きますよ。お母さん。」つて言ふ。母親は又、絹の嬉しさうな樣子を見るのが嬉しいので、
「さうかい」。と、これもにつこりするので有る。此頃は、朝顔も末に成つて來て、花が、幾分か小さめに成つて來た、が未だ咲き續けて居る。

絹は、今縁側に腰を掛けた。明日咲く蕾を數へ終つた所なので、スラリとした身體を　なよやかに、縁の柱に凭せて居る。著て居る浴衣の、白地に藍でクッキリ浮き上げた樣に濃いのと、其陰影の樣に薄いのと、二種の蝶を染め出した中形のメリンスが、紅入友染の帯に好く映つて居て、一體に少し淋しい絹の顔を、恐ろしく艶麗に見せて居る。
「明日は七ッ咲く。」と思ひ乍ら、絹は、凝と朝顔の方に、眼を遣つた。垣根一杯に纏ひ附いた葉と蔓の間から、明日咲く大輪の紅絞りと、白との蕾が、可愛らしく、並んで出て居る。何う云ふものか絹は、種々な草花を育てゝ、世話をして居ても、一番能く朝顔に身を入れる、水もたんと遣れば、蟲にも氣を着けて、時々、葉の裏を反して見る事も有つた。自分の育てゝ居る花の中で、朝顔が一番可愛いゝので有る。朝顔が咲く樣に成つてから、絹は、全身の興味と、執着と、愛好の念を、この花の上に集めた。

不圖絹は、居を動かした。
「朝顔と、藤子叔母樣とは、一寸似てるはね。」動かした丈だと思つたに、自然に聲が斯う出たので絹は、ハットした樣に見廻したが、四邊には誰も居なかつた。

絹には、見た事のない叔母さんが有る。今言つた藤子叔母樣と云ふのが、夫れなので、絹の父の一番下の妹だが、絹の生れる一寸前に死んだので、絹は寫眞の外見た事がない。美しかつたそうで有る。絹が何時か寫眞を見て、「奇麗なのね」と言つた時、藤子の直ぐ上の叔母のお道は
「なあに、素顔の方が、もつとよかつたよ。」と言つた。寫眞を見ても、單に奇麗とか、可愛らしいとか

云ふよりも、顔の凡ての輪廓が、水際立つた美しさを持つて居る。尙お道は、藤子が、顏の明るい樣に心も華は陽氣な人で有つた事や、お嫁に欲しがつた人の多かつた事や、容色に於いて姉妹中の水準を拔いて居た如く、お嫁に行つた家も、一番立派で有つた事や何かを話して聞かせた。絹は、此美しい叔母の藤子は、お嫁に行つて間もなく、御産の爲に死んだと計り聞いて居たので有つたが、近頃に成つてから、大きい伯母から、ぞつとする樣な話を、聞かせられた。

一體絹の家には、代々傳つて居る病氣が有る。奇態な事には、一代の中必つと一人、其れも、直系の女の人が、白羽の矢に當つた樣に、其に罹つて果てるので有るそうな。で、叔母の藤子も、御産の後が惡くつて死んだと云はれては居るが、其實、御産の時ふと、其病氣が出て、仆れたのださうで有る。

絹は、其を伯母の口から聞く迄、何んにも知らずに居た。もつとも、豫ねて自分の家には中風の遺傳の有る事は知つて居たが、そんな恐ろしい病氣の有る事は、少しも知らなかつた。伯母は、其を話してから、

「斯んな事が世間に知れると、まだ御嫁入前の絹ちやんの爲には、善くないからね。」と言つて、それとなく、誰にも言ふなと誡めた。

伯母から此話を聞いてから、絹は、暫くの間、夜毎に夢魔に襲はれて、苦しげに呻いては、次の室に眠つて居る母親に、搖り起された。

藤子の狂亂の狀態が、夢に入るので有る。寫眞で見た樣な顏の藤子が、廣い〳〵座敷の眞中に、たつた一人で座つて居て、絹を見て子供の樣にニコ〳〵して、オイデ〳〵をする。さうかと思ふと、彼の寫眞に見る樣な活々と、若々しい愛嬌の色が、顏中からすつかり消え失せて、云ふばかりなく凄艶の氣を帶んだ藤子が、奇麗な長襦袢と、白い脛を見せて、バラ〳〵と部屋から馳け出して、庭へ飛び下りて、庭の眞中で、ケラ〳〵と笑ふので有る。一番こはかつたのは、或晩夢の中で、藤子が、ふさ〳〵と長い眞黑な髮を振り亂して、兩手で引張る樣に髮を摑み乍ら、血走つた眼で、何んにもない空を凝と睨んで居るのを、見た時で有つた。其時、母親は、

「絹ちゃん。絹、絹。」と搖り起して、

「マア、何うおしなのだえ。大變に呻されて。」

と言つた。絹は、枕元の巾手で、ビツショリ汗を掻いた胸や頸の邊を拭き乍ら、未だ目に殘つて居る美しい人の、凄い恐ろしく狂亂の姿に、身を震はした。

絹の祖父は、何んとか云ふ名の、油で御神體を入り揚げると云ふ神樣、其を信心すると、孫子七代の運を、其人一人に招ぎ寄せると云ふ荒神樣を信心したさうである。其を祀つて、眞個に榮華の限りを盡したと云ふお祖父樣の娘、派手に育て上げられた其娘達の中にも、すぐれて美しかつた人、撰ばれて人身御供に擧げられた藤子よ。絹は、まるで人身御供の樣だと思つて、叔母の藤子を、哀れにも又傷ましく思つた。そして、藤子の前の代は誰、其先代は誰と明らかに伯母が話すのを聞き乍ら、一代の中に一人しか罹らないそれも女計りに來ると云ふ樣な、まるで、何かに祟られてゞも居る樣な話が、果して事實だらうかと思ひ迷つたが、何んとなくこわい樣な氣がして、母にも誰にも尋ねなかつた。

今絹は、椽側に腰掛けて庭先の朝顔を見乍ら、朝顏の花と、叔母の藤子の運命とを、比べて見た。勿論、朝顔の花は、狂的な趣きの有る花ではない。けれども、鮮な色に咲いて、しかも盛りの短い朝顔、花の身體とも云ふべき其蔓ですらも、夏の間しか生き得ない、まして花は、一日の始まりである朝の露の中にしか微笑み得ない朝顔は、姿も心も華に美しくて、短命に終つた藤子とは、鮮な事と、短く生きると云ふ點に於いて、似て居ると思つたのである。

斯うして、朝顔と藤子の運命とを比べて幾分か觀劇的の哀傷を味つて居た絹の頭は、此時更に、も少し迫つた或物に襲はれた。それは、藤子の次に擧げられる人身御供は、誰だらうと云ふ事である。絹は、名門の系圖と云ふ有難さうな物と一緒に、其中をほのがくれに流れて居る、一筋の暗い流をも、受繼がなければ成らない系統に置かれた女の人を、數へ立てた。五六年前に、大阪で亡くなつた從姉は、ヒステリカルな人で、其に罹りさうなものだつたが、是は其ではなしに、急性の肺炎で死んだ。殘つて居る直系の娘は、自分と、橫濱に居る瀧ちやん、死んだ從姉の妹であると數へ乍ら、若しも、此の、一代に一度起ると云ふ悲劇、一人の女が、人身御供に擧げられなければ濟まないと云ふ恐ろしい事の幕開が、近い未來にあるとしたならば、果して、此二人の中

何方に白羽の矢が立つだらうと考へたが、平常から弱いから、自分かも知れないと絹は思つた。
「私なら私でもいゝわ。」平常と少しも變らない。沈着いた靜な調子で、絹は斯う言つた。自分よりも二つ年上で、既に一人の子の母に成つて居る瀧ちやんが成るのを見るのは、自分が成るよりも辛らい事だと思つたのである。
考へ込んで知らずに居たが、不圖氣が着くと、もう薄暗かつた。先刻の、二つ並んだ蕾の紅の方はもう見えない、白いのが、ほんのりと浮いてる樣に、夕闇の中に際立つて居た。

◎　◎　◎　◎　◎

翌日、絹は日曜日なので御醫者樣へ往つた。絹の御醫者樣は病院へ出ているので、日曜でなければ、御日中家には居ないのである。
絹は、白い雨絣がサラ〳〵と出て居る黑地の御召の、自分の一番好き單衣を出して着て、それに、洗朱の地に、白く芭蕉を拔いた、帶を締めたのが、よく似合つて奇麗に見えた。絹が診察所のドアを開けて入つた時、若い、姿の好い醫學士は
「ヤア、如何です。」と、其白い顔に笑を湛へて聞いたが、診察し終つて、
「ムウ、大分善い。此の分で行けば、此秋の末頃には、御母さんも御心配なさらなくつてもいゝ樣に成りませう」。と言つて、
「御咳も、そんなに出ませんね。」と聞いた。
「エヽ、忘れました頃に、二つ三つ出る丈で御座ります」。
「ムウ」と點頭いたが、少し離れて帶を締め上げて居る絹を見て
「朝顔は、未だ咲いて居ますか」。とやさしい調子で聞いた。絹は、
「エヽ。」とにつこりしたが、
「でも、もう餘程末になりまして、花が少し小さく成りました。」
「さうでせう。」と言ひ乍ら、振り向いて、書生に、何か藥の處方を云ひ付けて居た。
暫くためらつた末、絹は、それとなく、伯母の言つた事を聞いて見た。勿論自分の家の事とは言はなかつたので有る。
凝として聞いて居たが、絹が語り終つた時、此快活な若い醫學士は、輕く笑つた。そして、なあに其

は偶然です、もつとも、病氣によつては、男の罹り易いのと、女の罹り易いのと有りますが、そんな、氣違ひに成るなんて云ふのは、婦人に限つた事じや有りません。それに、注意の仕様によつては、いくら其遺傳を受ける系統に有る人でも、免れる事が出來ます。」と言つた。

けれども絹は、いくら醫學士がさう仰しやつても伯母の話を全然迷信的なものとか、偶然さう成つたものとか思つて、打消す事は出來なかつた。

そして、昨夜白い朝顔の蕾が、薄闇にくつきりと浮いて見えた其面影が、絹の胸から消えない様に、其事も消えなかつた、と云つて少しも恐れはしなかつた。恐れはしなかつたが、忘れもしなかつたのである。

編輯だより

△夏期修養の記念寫眞を、本誌に掲載相叶はざりしは、誠に遺憾の極みにて候。元來横須賀は軍港とてその地と水の少しにても撮影叶はぬものなるを、前以て其の筋に願ひ出づれば、會の性質上、許可を與へらるべしとの事に、豫め寫眞師に其の旨通知いたし置き候にも拘らず、如何なる怠りにてありけん、その運びに至らずして撮影いたしたる由にて、折角のものを反古に致さずばならぬ次第と相成候。

△さりながら此處に結ばれたる友情――人と人とのみならず、神に向つての交り――は、日を經るに從ひて、いや鮮やかに我れ等の心にうかび出づるを覺え給はずや。殊に今修養會が　先帝陛下の御不豫の中に始り、閉會に先つ一日、遂に崩御の報に接し參らせ、我れ等は未だ嘗てなき大打擊に心震ひ、悲痛に心曇るの時に當り、修養會の諸先輩を通じて傳へられたる神の聖言は、かゝる心に安靜を與へ、解決を與へ、希望を與へ候時、私かにかの會に向つて深き感謝を捧ぐるを禁ずる能はざりしは、われのみにてはあらじと覺え候。

△本誌は久しく馴れし名に訣れ、表題の如く「女子青年界」と改名いたし候へども、本誌の精神に於てはいさゝかも昔に異る所なく、神の忠婢として世に仕へんの心切に候。微々たるこの冊子の何事も心に滿たぬ節のみ多く候へども、幸に諸愛姉の力を添えさせ給へば、幼き丈けまたその成長も速かならんを樂しみて、編者は一層の努力を加へ申すべく候。

National Committee

Headquarters, 12Sanchome Tamachi,Ushigome,Tokyo

Mrs. Hana Ibuka, Chairman
Dr. Kei Okami, Vice-Chairman
Miss Tami Mitani, Secretary
Dr. Tomo Inouye, Treasurer
Miss Michi Kawai,
Active Member World's Committee
Chairman Women's Sub-committee
World's Student Christian Federation
Miss Matsu Okonogi,
Editor "Joshi Seinen"

Resident Members	Non-Resident Members
Miss Ume Tsuda	Madame Asa Hirooka, Osaka
Miss A. B. West	Mrs. K. Araki, Osaka
Miss Uta Suzuki	Mrs, Koito Saiki, Kyoto
Miss Matsu Okonogi	Miss M.F. Denton, Kyoto
Miss Kita Hasegawa	Miss Michi Matsuda, Kyoto
Miss Tei Ninomiya	Miss N.B. Gaines, Hiroshima
Mrs. G. M. Fisher	Miss Wyne-Willson, Nagoya
Miss Sarah Ellis	Miss Yoshi Kajiro, Okayama
	Miss M. Brownlow, Hakomate

Secretaries
Miss A. C. Macdonald, National, General
Miss Ruth Ragan, National, Office
Miss Margaret L. Matthew, General, Tokyo
Miss G. R. Watney, Associate, Tokyo
Miss Mary Page, Special Worker
Miss Miyo Kohashi, Assistant Editor
"Joshi Seinen"

大正元年八月廿八日印刷
大正元年九月一日發行

發行兼編輯人 東京市牛込區田町三丁目十二番地 エー、シー、マクドルド
印刷人 東京市赤坂區田町五丁目十一番地 齋藤謐
印刷所 東京市赤坂區田町五丁目十一番地 齋藤活版所

部數	定價(郵稅共)	海外
一部	金五錢	金九錢
十二部	金五拾錢	金壹圓

廣告		
一頁 金六圓	半段 金貳圓	
半頁 金三圓五拾錢	一行 金貳拾錢	

■新秋第一の讀み物■

△聖戰の姉妹篇出づ

原著者　ジヨン・バンヤン氏
翻譯者　松本雲舟氏

■定價　金壹圓
■郵稅　金拾貳錢
■裝幀　艷麗典雅

罪人の永へに

恩寵溢るるの記

本書はバンヤンの自叙傳にして、四ヶ年に渡る彼が煩悶苦闘の結果、辛うじて眞正の信仰に辿り着きたる深刻骨に徹する實驗記を始め、滿十二年間の獄中生活に於て如何に彼が神の恩寵に浴せるか、又いかに大膽に信仰の敵者と戰へるかを詳細に記述せり。

バンヤンの大傑作たる「天路歷程」を生きたる事實として讀者の眼前に躍如たらしむるは實に本書也。信仰の友として偉大にして然かも懷しきバンヤンの生涯は本書の裡に活けるが如し。アウガスチンのコンフエツシヨンに優るとも劣らざる實質を有す。

卷頭に附せる「バンヤン傳」は[illegible]府氏の苦心の筆、材料極めて淸新、本書の背景を描いて一段の光彩を放てり。

東京京橋銀座　警醒社書店　振替東京五五三番

大正元年九月一日納本發行(毎月一回一日發行)
明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

YOUNG WOMEN OF JAPAN

Joshi Seinen

Volume. VI Sept. 1912. No. 8

The Official Organ of the National Committee of Young Women's Christian Associations of Japan.

(東京赤坂福田町 齋藤活版所)